秋田県文化財調査報告書第79集

遺跡詳細分布調査報告書

1981・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財保護行政の中で遺跡分布調査は最初に行なわなければならない仕事の一つであります。この調査は遺跡保護の基礎的な仕事であります。

この基礎的な仕事である分布調査は東北横断自動車道建設に伴うもの、国営ほ場整備・県営土壌汚染特別対策事業・玉川ダム建設予定地内スポーツ・ゾーン建設予定地内などに所在する遺跡の範囲確認調査を実施いたしました。

東北横断自動車道建設予定地域には27ヶ所の遺跡が確認され、また遺跡が所在する可能性のあるところとして31ヶ所ほど指摘されました。これらの遺跡及び場所については今後具体的な保護策をこうずる必要があり、遺跡の所在する市町村と連絡をとり、開発側と協議を重ねてまいりたいと考えております。

また範囲確認調査した遺跡は、昭和56年度に保護及び発掘調査すべて具体的に動き出す必要があり、埋蔵文化財を保護する立場で対策をこうじたいと考えておりますので、今後とも遺跡の保護にご協力くださいますようお願い申し上げます。

最後にご多忙のところ調査をお引き受けくださいました調査員ならびに調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和56年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠山芳郎

目　　次

序
〔例言〕
Ⅰ．はじめ …… 1
Ⅱ．昭和55年度、遺跡分布調査実施要項 …… 1
遺跡分布調査 …… 1
範囲確認調査 …… 2
Ⅲ．調査の結果（範囲確認調査）…… 4
真壁地トドメキ遺跡 …… 5
真壁地遺跡 …… 8
四郎兵衛堤遺跡 ……17
平鹿遺跡 ……24
大深Ⅰ・Ⅱ遺跡 ……29
スポーツ・ゾーン関係遺跡 ……32

〔例　言〕

1．本報告書は昭和55年度、秋田県教育委員会が国庫補助を得て遺跡分布調査を実施した結果をまとめたものである。
2．東北横断自動車道建設予定地内の分布調査の結果は昭和56年度の調査終了後に掲載することにした。
3．範囲確認調査は各遺跡担当者が作成したものをそのまゝ掲載したものである。したがって執筆者は調査担当者である。
4．本報告書編集は秋田県教育庁文化課が編集した。
5．範囲確認調査のうち、勘六遺跡は調査の結果、遺構その他確認できなかったことから、本報告では除外した。また分布調査で上野Ⅰ、上野Ⅱ大深Ⅰ、Ⅱと分けて登録されていた遺跡は一括して扱った。

〔感　謝〕

本調査には次の方々からご協力いただきました。記して感謝の意を表したいと思います。

能代市教育委員会、秋田市教育委員会、河辺町教育委員会、雄和町教育委員会、協和町教育委員会、西仙北町教育委員会、南外村教育委員会、大曲市教育委員会、大雄村教育委員会、横手市教育委員会、増田町教育委員会、十文字町教育委員会、田沢湖町教育委員会、東北農政局能代開拓建設事業所、建設省玉川ダム建設工事事務所、日本道路公団秋田調査事務所。

Ⅰ．は　　じ　　め

昭和55年度の遺跡分布調査は東北横断自動車道秋田線（秋田～横手間）の56km、スポーツゾーン建設予定地の二地区であった。また範囲確認調査は国営能代開拓建設事業、県営土壌汚染対策事業、玉川ダム建設事業に係る８遺跡の調査を実施した。

東北横断自動車道建設事業に伴う遺跡分布調査は調査員を委嘱して実施し、スポーツ・ゾーン建設予定地及び範囲確認調査については県教育庁文化課職員が中心となっておこなった。各調査は以下の実施要項にしたがって実施した。

Ⅱ．昭和55年度、遺跡分布調査実施要項

遺跡分布調査

１．調査の目的

建設省・日本道路公団が計画し、実施しようとしている東北横断自動車道（秋田線）横手～秋田間の道路建設予定地域が発表されました。その概要は延長56km、幅約 250ｍであります。この計画区域内には多くの未発見の遺跡が存在するものと予想されます。

そこで事業計画に先立って遺跡の有無を確認し、埋蔵文化財の保護策をこうずるものである。

２．調査主体者

秋田県教育委員会、教育長　畠　山　芳　郎

３．調査対象面積及び関係市町村

幅 250ｍ　　延長56km

関係市町村	横手市・平鹿町・大雄村・大曲市・南外村
	西仙北町・協和町・雄和町・河辺町・秋田市

４．調査員

市町村名	調査員名
横手市	堀　江　　彰　・　大　倉　俊　一

平鹿町	丸谷成三・山田貞吉
大雄村	高田秀雄・山田弥太郎
大曲市	佐藤清実・高橋健治
南外村	高橋修司・伊藤順三
西仙北町	信太健一・佐々木敏
協和町	田崎　悟・長山幹丸
雄和町	佐々木金也・中村善一郎
河辺町	田口誠一・鈴木喜久一
秋田市	菅原俊行・安田忠市

5．調査の方法

計画路線の範囲内を表面採集及び一部発掘調査を実施して遺跡の所在を確認する。

6．調査期間

昭和55年6月1日～昭和56年3月31日

野外調査　6月1日～11月30日
屋内作業　12月1日～1月31日（調査カード作成）
報告書作成　2月1日～3月20日

範囲確認調査

1．調査の目的

遺跡範囲確認調査は遺跡を部分的に発掘し、その深さ・広さ・遺構・遺物の有無を確認し、遺跡の性格を推測することを目的とする。今回調査の対象になっている遺跡は昭和55年度ほ場整備等の開発計画内にあり、破壊される可能性のある遺跡である。そこでこれらの遺跡の保護策をこうずるために緊急に調査を実施するものである。

2．調査の主体者

秋田県教育委員会

3．調査員

秋田県教育庁文化課学芸主事　富樫泰時

	社教主事	永瀬福男
	〃	畠山憲司
	主事	庄内昭男
	文化財主事	高橋忠彦
（補佐員）		佐藤和弘
		大高博康
（補助員）		高橋浩樹
		三嶋隆儀
		桑原隆

4．調査対象遺跡

原因	遺跡名	所在地	原因	遺跡名	所在地
能代開拓	上野Ⅰ	能代市	玉川ダム	大深Ⅰ	田沢湖町
	上野Ⅱ	〃		大深Ⅱ	田沢湖町
	真壁地	〃	公害防除	平鹿	増田町
	四郎兵衛	〃		勘六	十文字町

5．調査の方法

① 表面採集及び発掘調査（遺構確認面まで掘り下げる）を行ない、遺跡の深さ・広さ及び性格を推測する。

② 調査期間は6日～10日間とし、その期間でできる限り発掘面積を面的に広げて遺構の確認につとめる。

③ 測量は新規に行なわず、開発部局で作成した地図の一番大きな縮尺図面を用いる。

④ 遺構、遺物の有無を確認し、記録する。遺跡全体の写真、発掘状況の記録は必らずとる。

⑤ 遺跡の立地条件に応じて適当な調査を実施する。

III、調査の結果（範囲確認調査）

真壁地トドメキ遺跡

1．所在地

能代市真壁地字トドメキ

2．面　積

A地点……約10,000㎡

B地点……約10,000㎡

C地点……約 4,200㎡

D地点……約 5,000㎡

3．調査期間　昭和55年10月22日～11月1日

4．調査者　永瀬福男・大高博康

5．遺跡の立地の特徴

東雲台地の南縁を侵蝕してできた小谷の東側に位置する。標高約25m。遺跡の南には、米代川が西流し、日本海に注ぐ。遺跡の現況は、大部分が畑地、一部が原野である。

6．範囲・時代・性格

A地点からは（杯・甕）が検出されたほか、竪穴住居跡も確認された。平安時代の集落跡であると考えられる。B地点からは弥生式土器がわずかに出土している。C地点からは土壙1基、D地点からは溝1条と須恵器片1点・石鏃1点のみで、性格は不明である。また、C・D地点の範囲は明確ではない。

7．地層（深さ）

A～D地点とも平担な段丘面上にあるため、地層の構成はほぼ同じである。第I層は黒褐色土層（20～30cm）・第II層は暗褐色土層（20cm）・第III層は地山ローム層となる。

8．その他の特記事項

「トドメキ」という小字名は、「向能代字トドメキ」・「真壁地字トドメキ」という使い方がされ、どちらにも遺跡が存在する。混乱をきたさないために、「向能代トドメキ遺跡」・「真壁地トドメキ遺跡」と呼称したい。

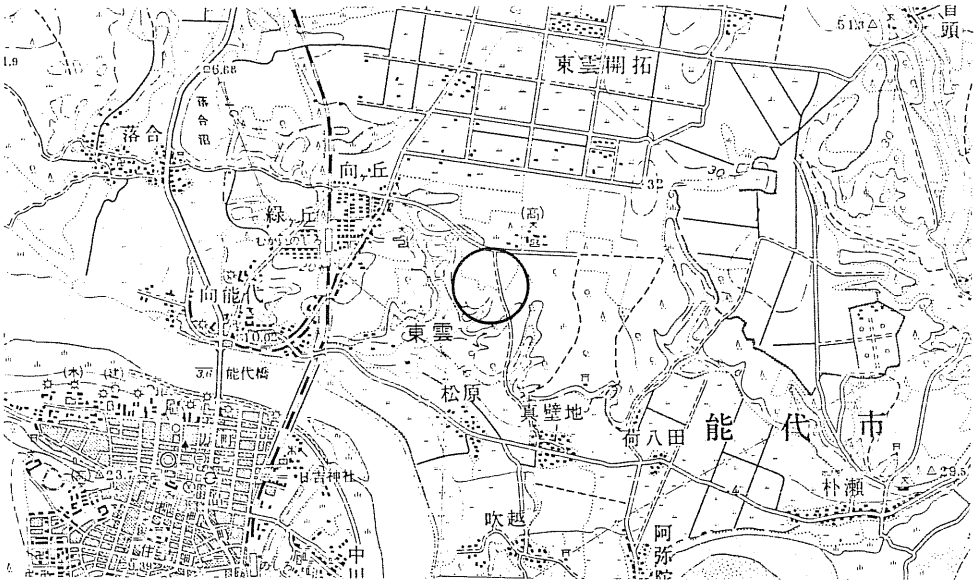
なお、真壁トドメキ遺跡A～D地点の試掘面積は、677㎡である。

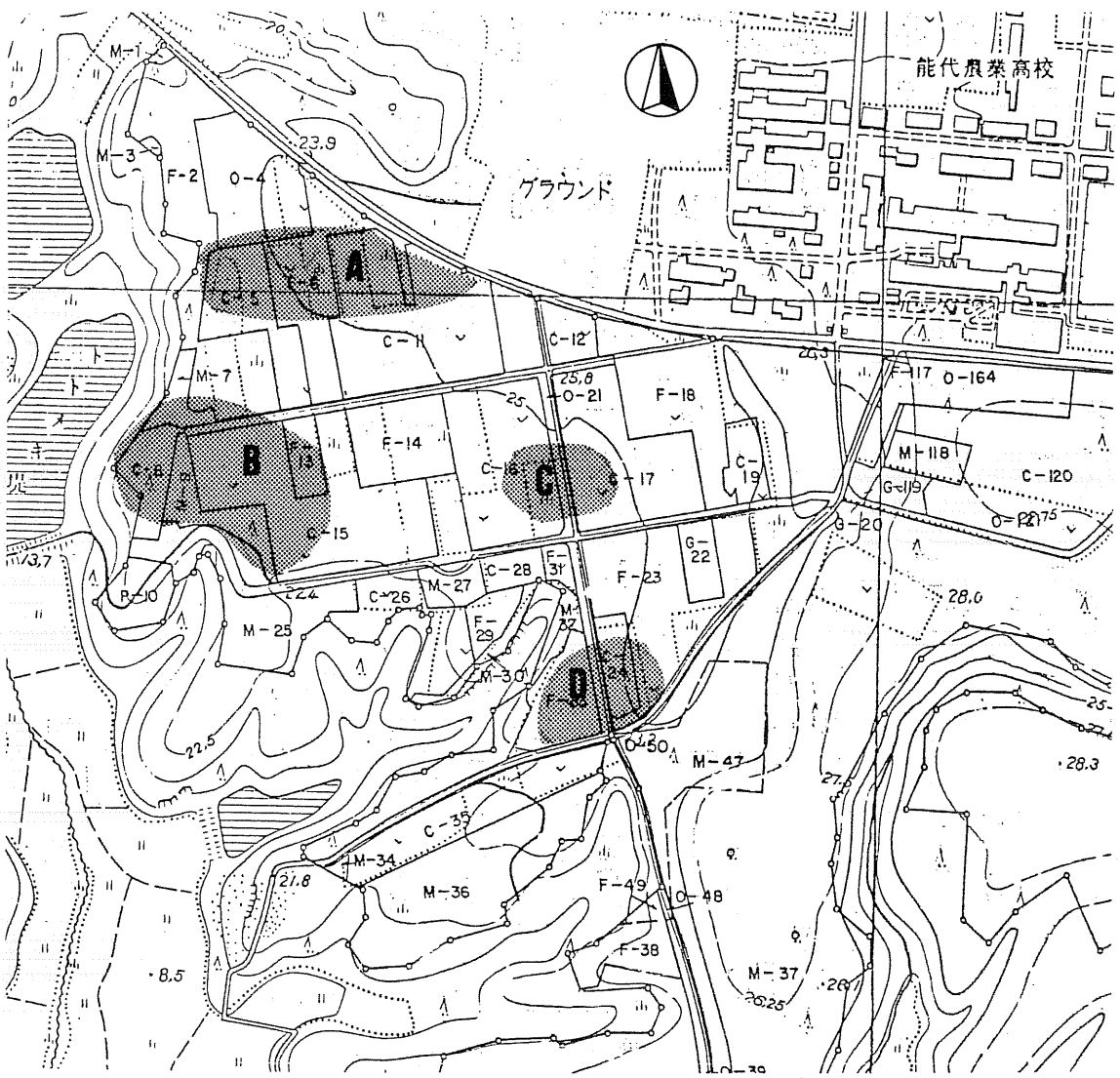
第１図

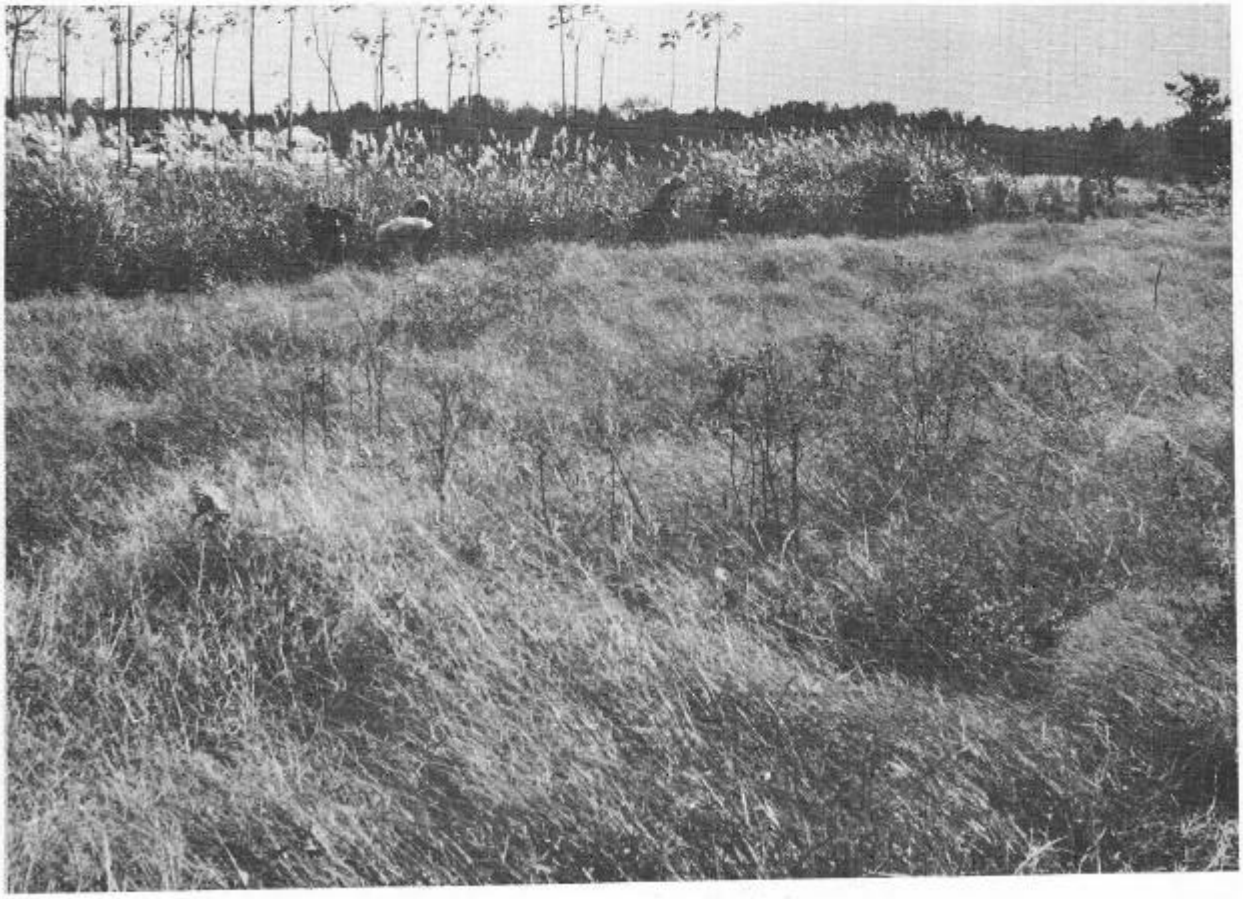
トドメキ遺跡

▶位置図 $\left(\frac{1}{5万}\right)$

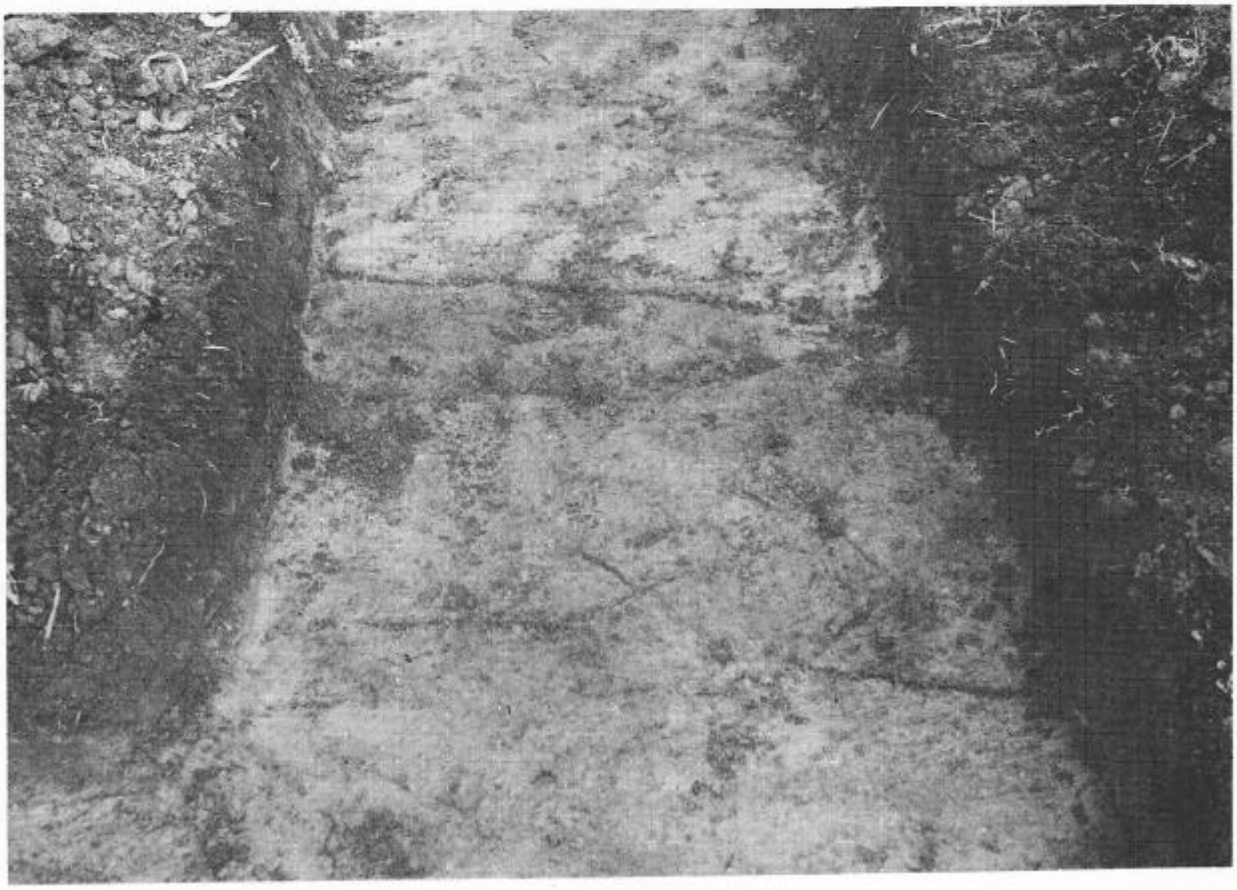
範囲図▼ $\left(\frac{1}{5千}\right)$







図版１　トドメキ遺跡（上）西▶東（下）東▶西



図版 2　（上）トドメキ遺跡Ｃ地点の土壙
（下）　〃　　Ｄ地点の溝

真壁地遺跡

1．所在地

能代市真壁地

2．面　積

約60,000m²

3．調査期間

昭和55年10月23日～11月２日

4．調査者

富樫泰時

5．遺跡の立地と特徴

遺跡は米代川河口から４kmほど上流右岸、標高21ｍ前後の台地上にあるいわゆる東雲台地の南端に位置し、県立農代農業高等学校に通ずる道路が真壁地部落から蛇行しながら北にのびている。遺跡はこの道路が台地に登り切ったところからはじまり、その左右、すなわち東西に広くのびている。東は四郎兵衛堤、西は水田で区切られている。遺跡のある台地には二つの谷が入りこんでいて、その斜面から台地上は一面雑木林となっており、中に杉・松が植林されている。

6．範囲・時代・性格

遺跡は台地全域（範囲とした）から古代の土師器・須恵器が出土し、中に竪穴住居跡と思われる遺構がいくつか確認できた。以上のことから古代（平安時代）の集落跡であろうと推測される。

またＡとした地区から縄文時代後期前葉の十腰内Ｉ式土器を多量に出土する地点がある。Ｂ地区からは須恵器カメの破片などが出土した。遺物からこの地点には「登り窯」の存在が予想される。Ｃ地区からは縄文時代後期前葉の竪穴住居跡・又四郎兵衛堤に接した台地最東端からは縄文時代中期中葉の竪穴住居跡と見られる遺構が確認された。北にすこしはなれたＤ地区からは縄文時代晩期末～弥生時代の土器が出土した。

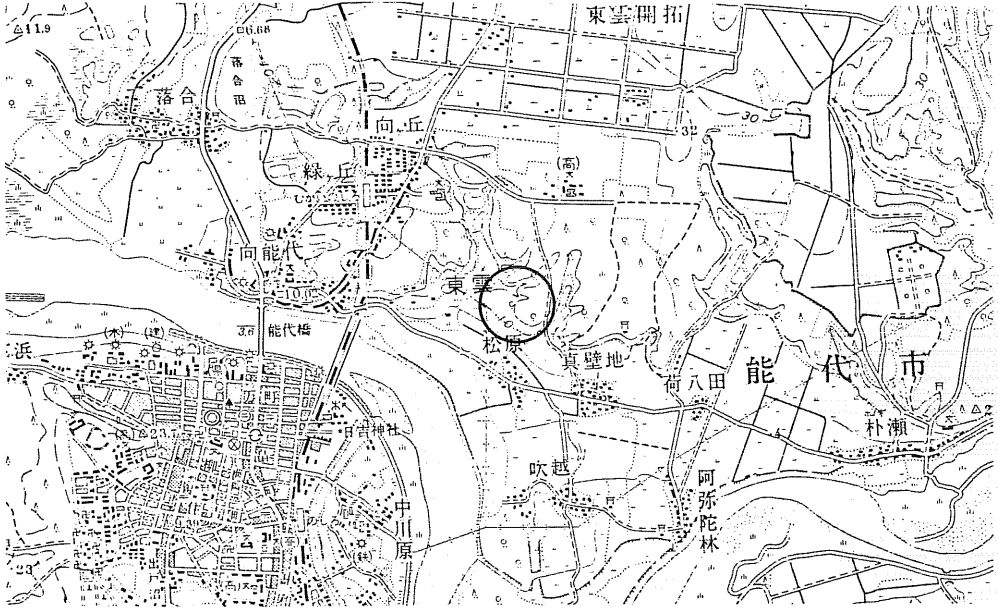
出土遺物はＡ地区から縄文後期前葉の深鉢形土器片、Ｂ地区から須恵器杯・カメ・鉄さい、Ｃ地区から縄文後期前葉の深鉢形土器片、Ｄ地区からはハケで器面調整し、その上に縄文の施された深鉢形土器片、変形工字文の土器片などが出土した。

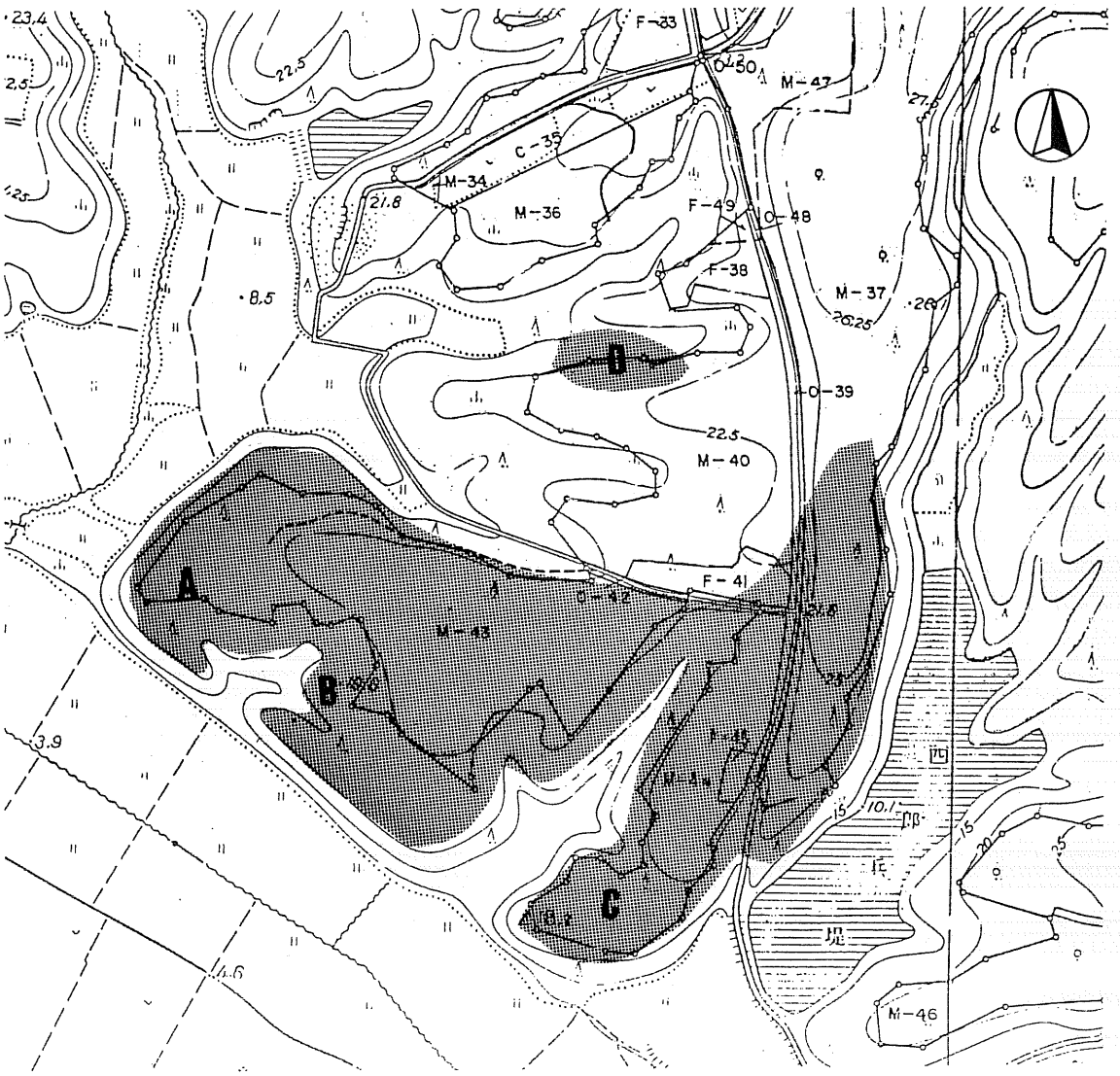
第２図

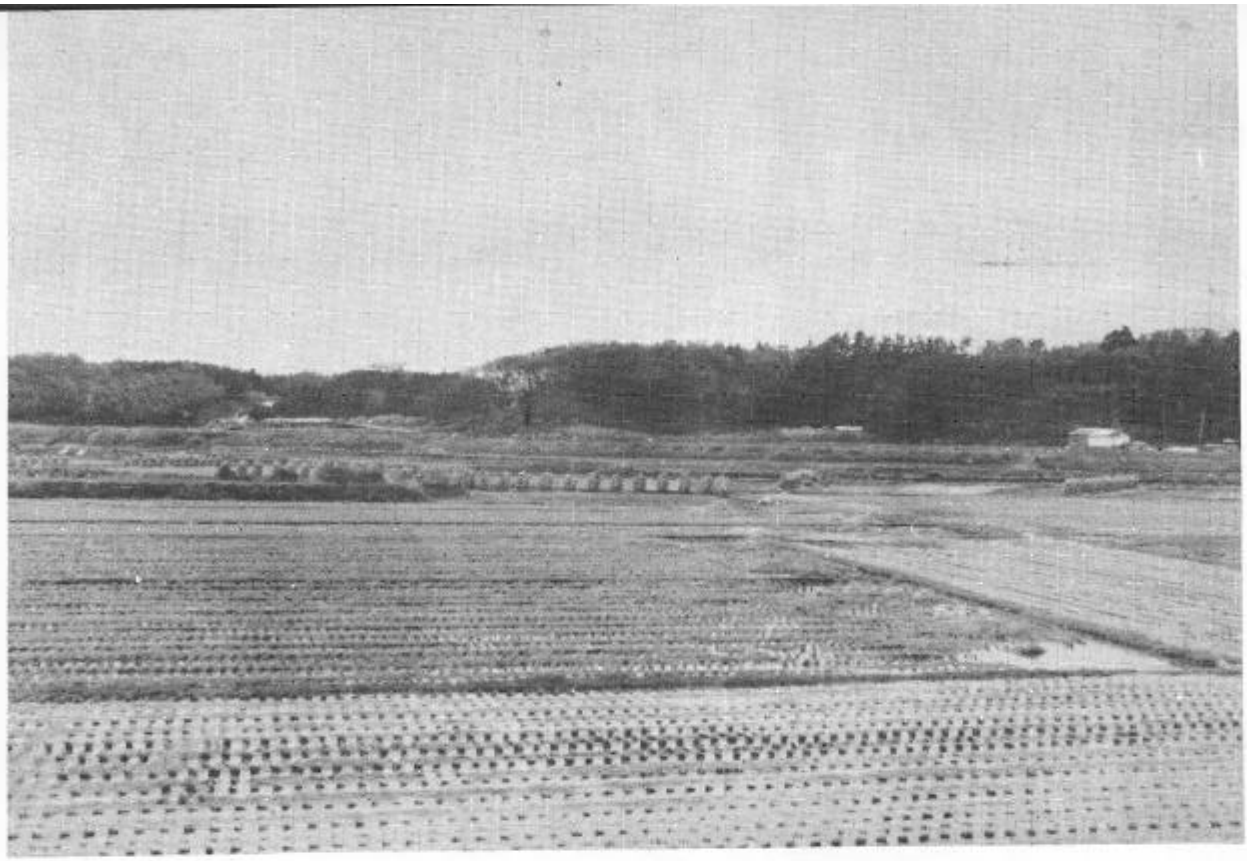
真壁地遺跡

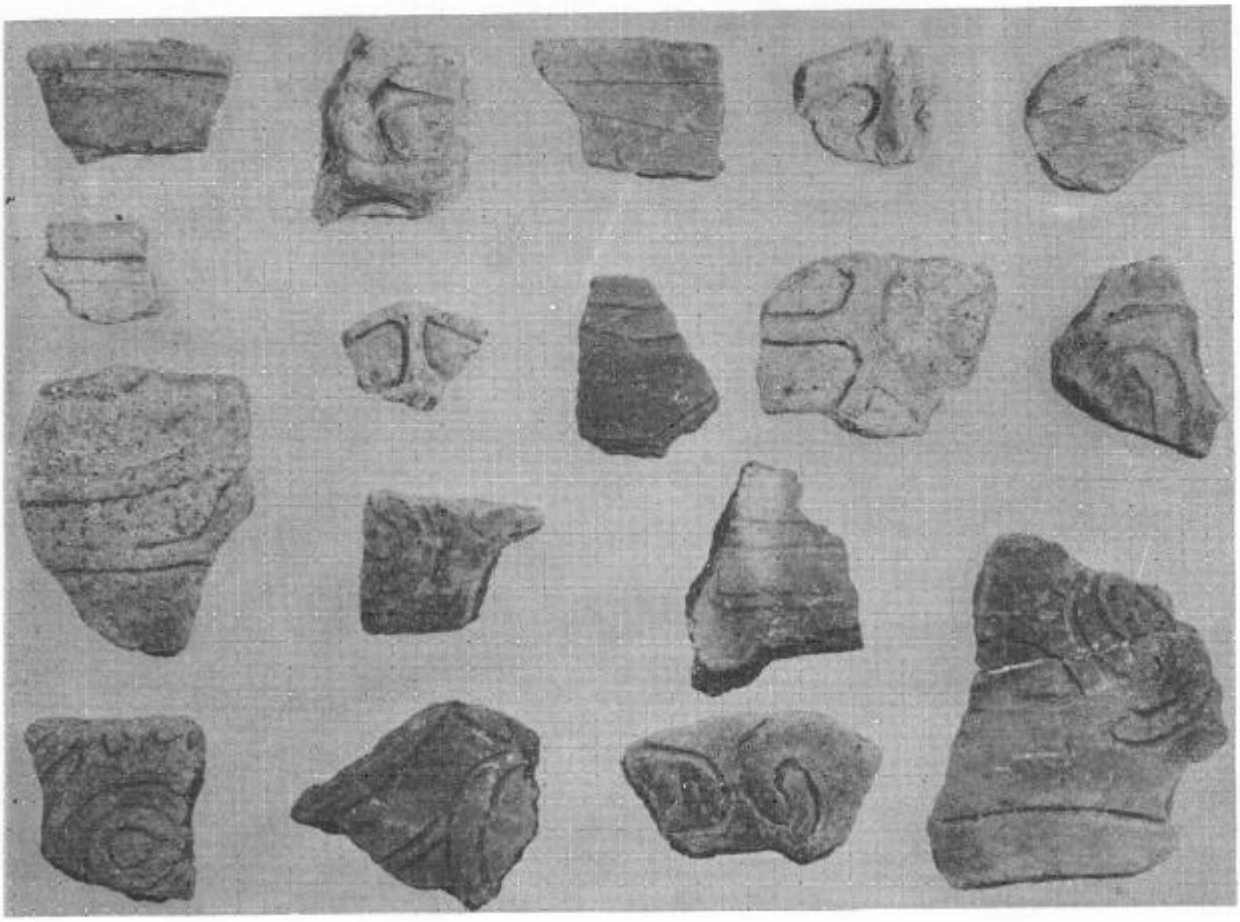
▶位置図 $\left(\frac{1}{5万}\right)$

範囲図 $\left(\frac{1}{5千}\right)$ ▼

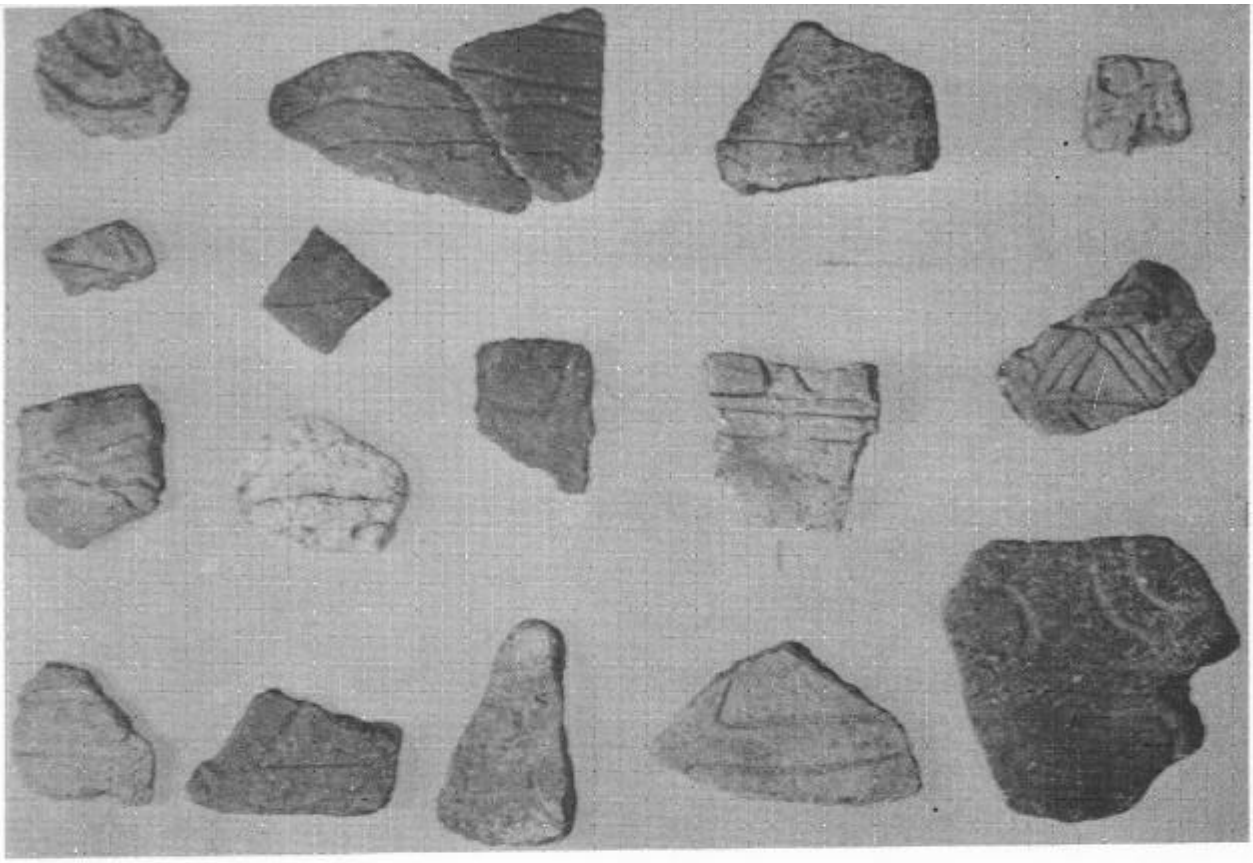


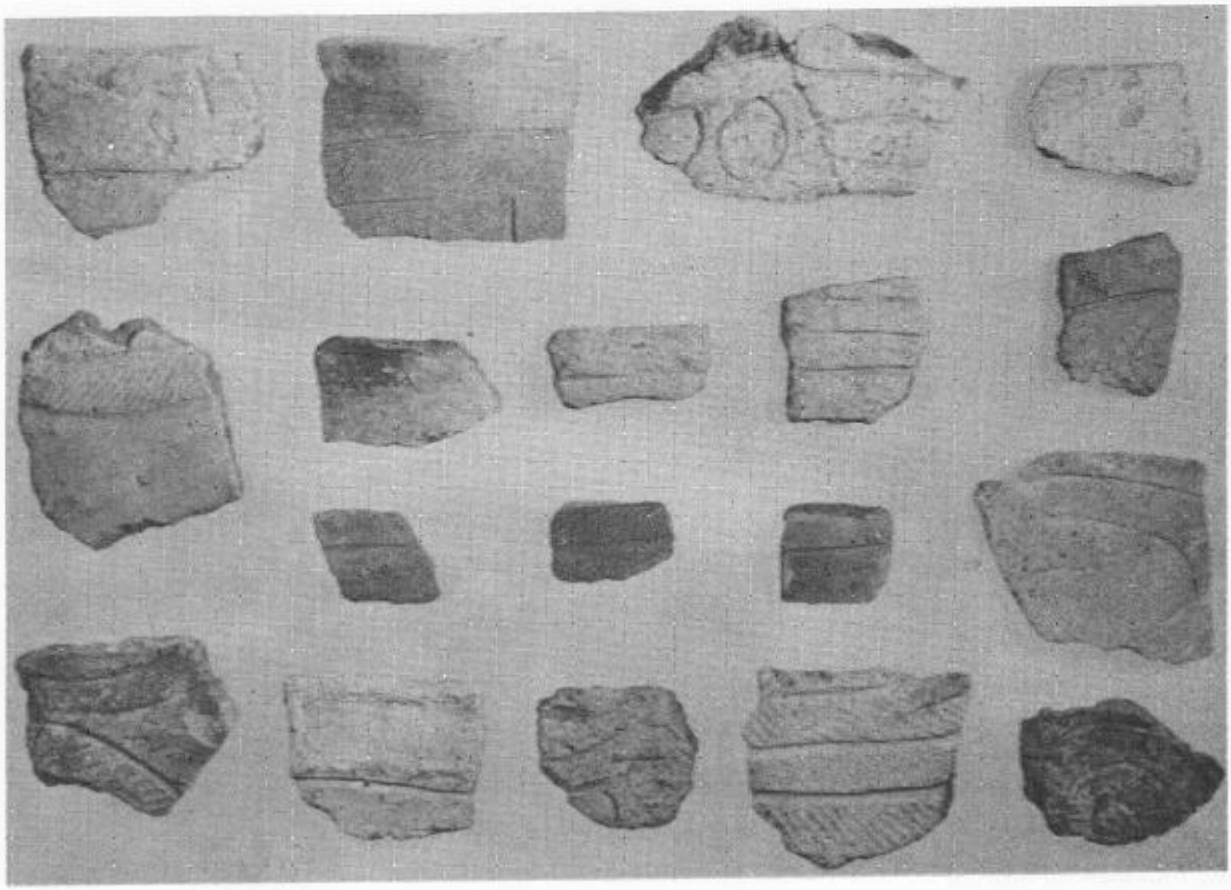




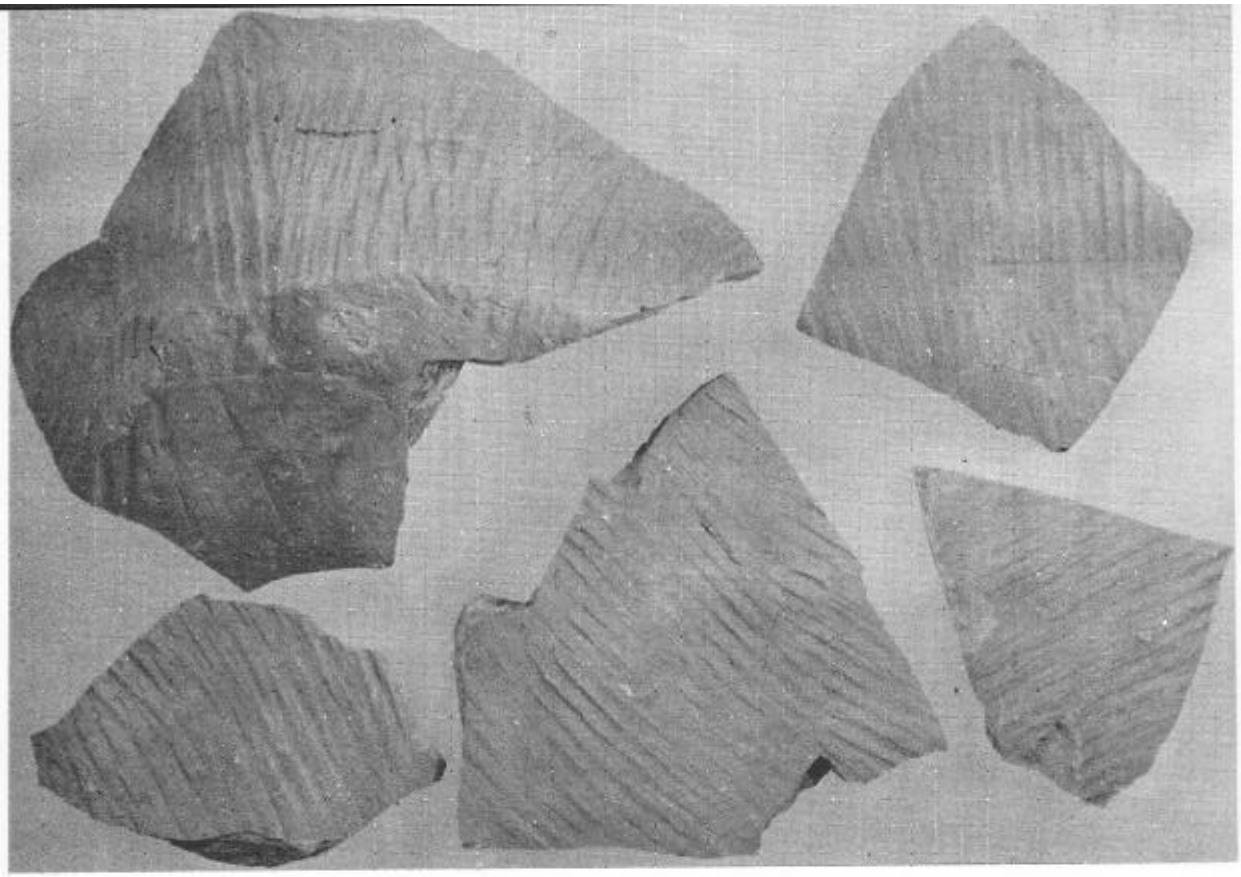


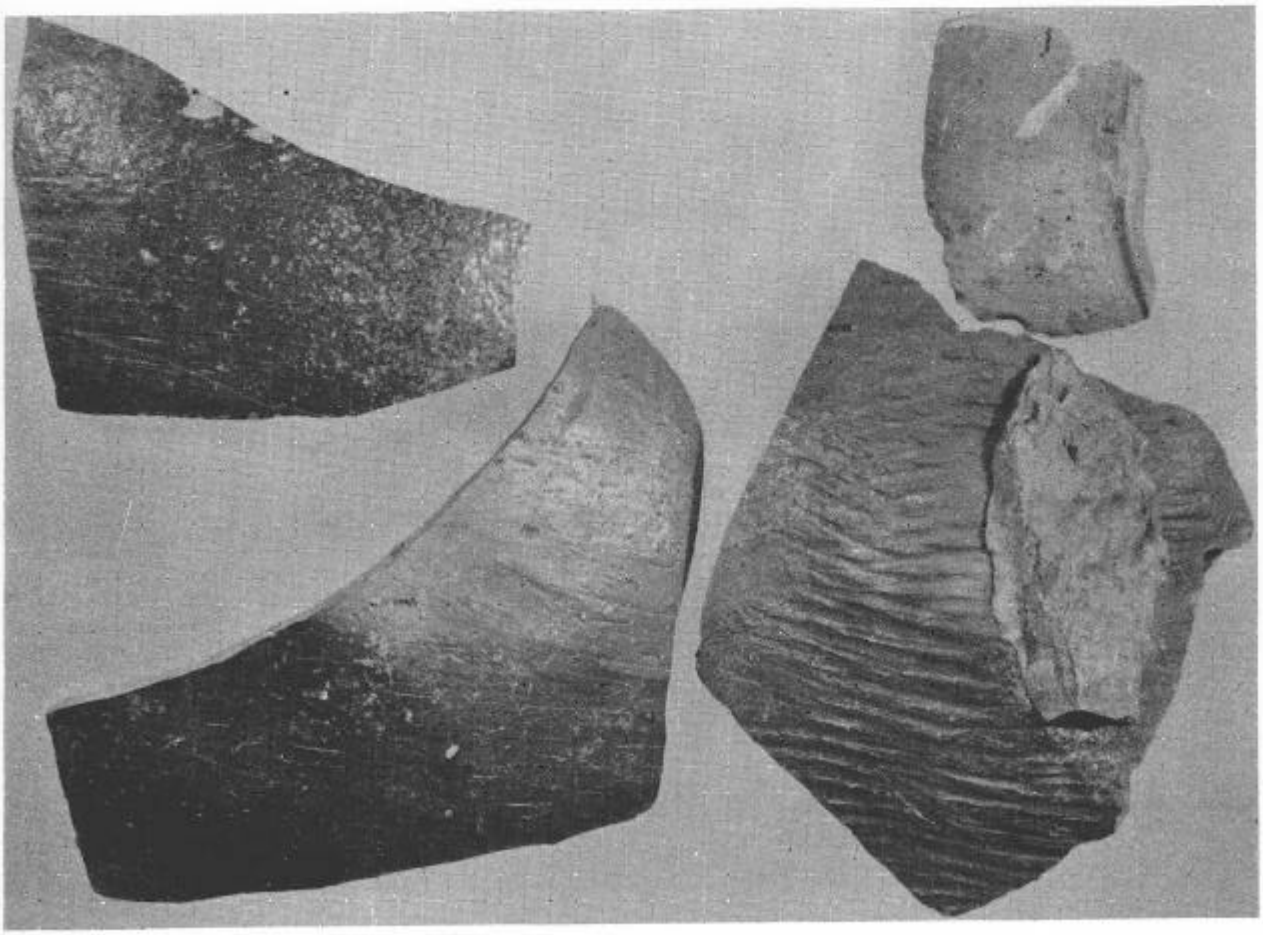
図版 3　上．遺跡遠景（真壁地）
下．A地区出土遺物



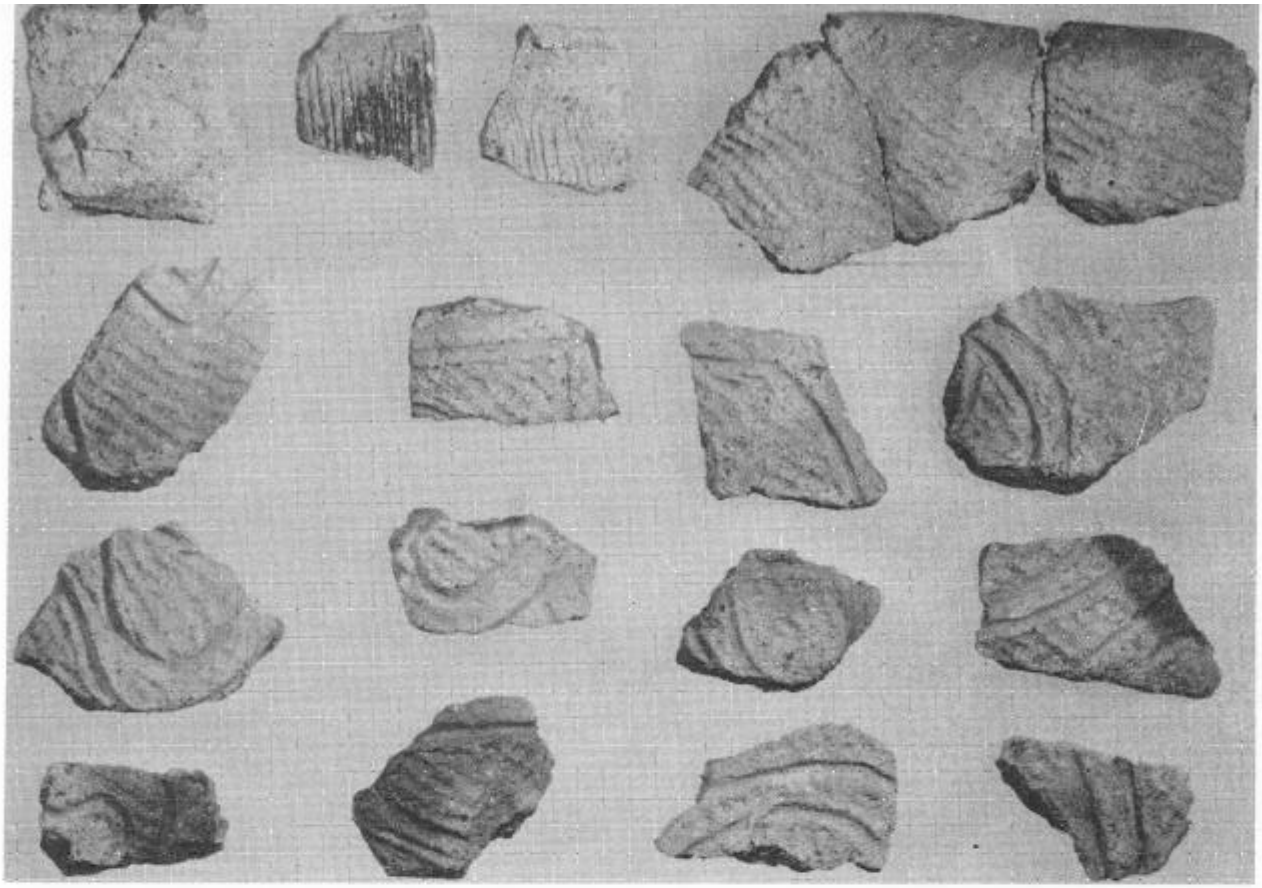


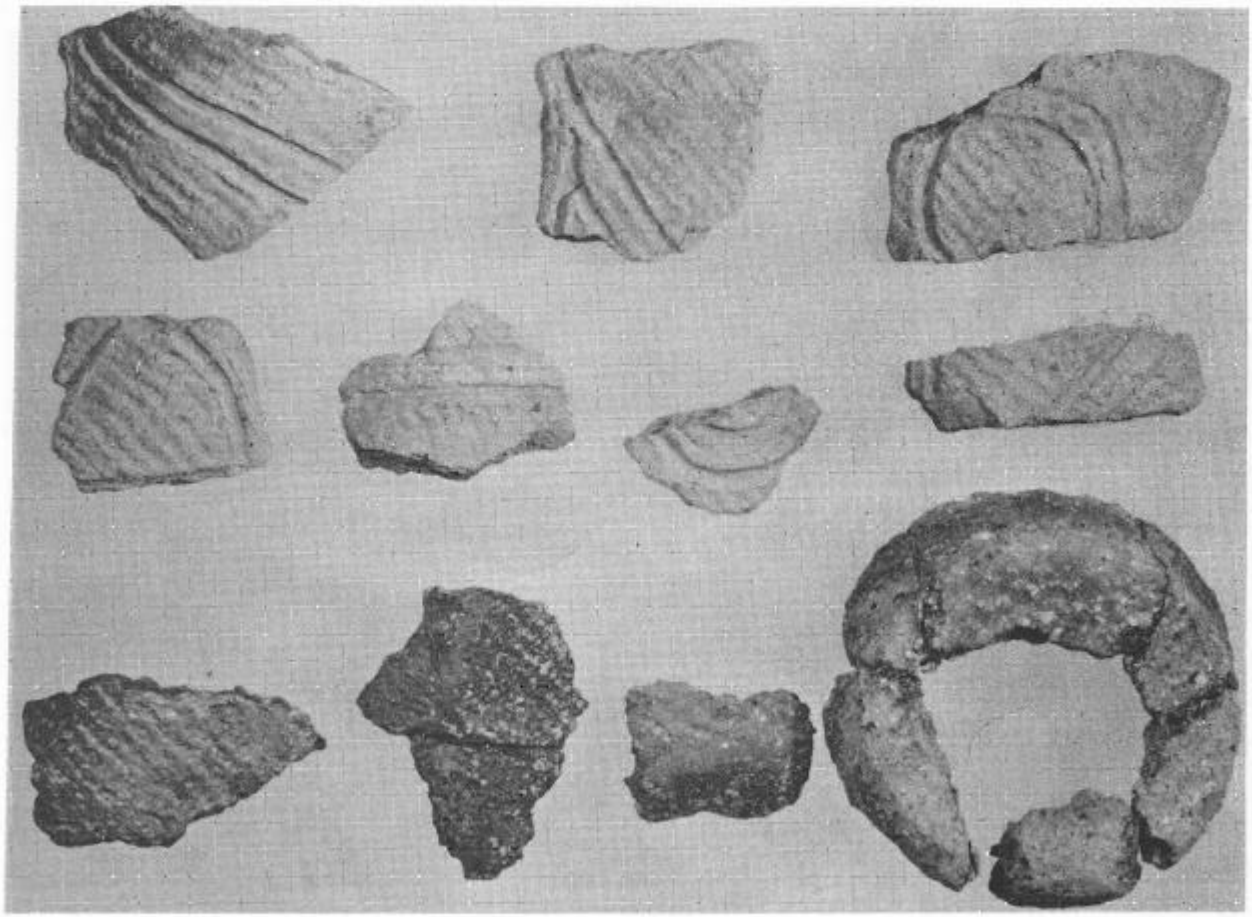
図版 4　上．下とも真壁地Ａ地区出土遺物



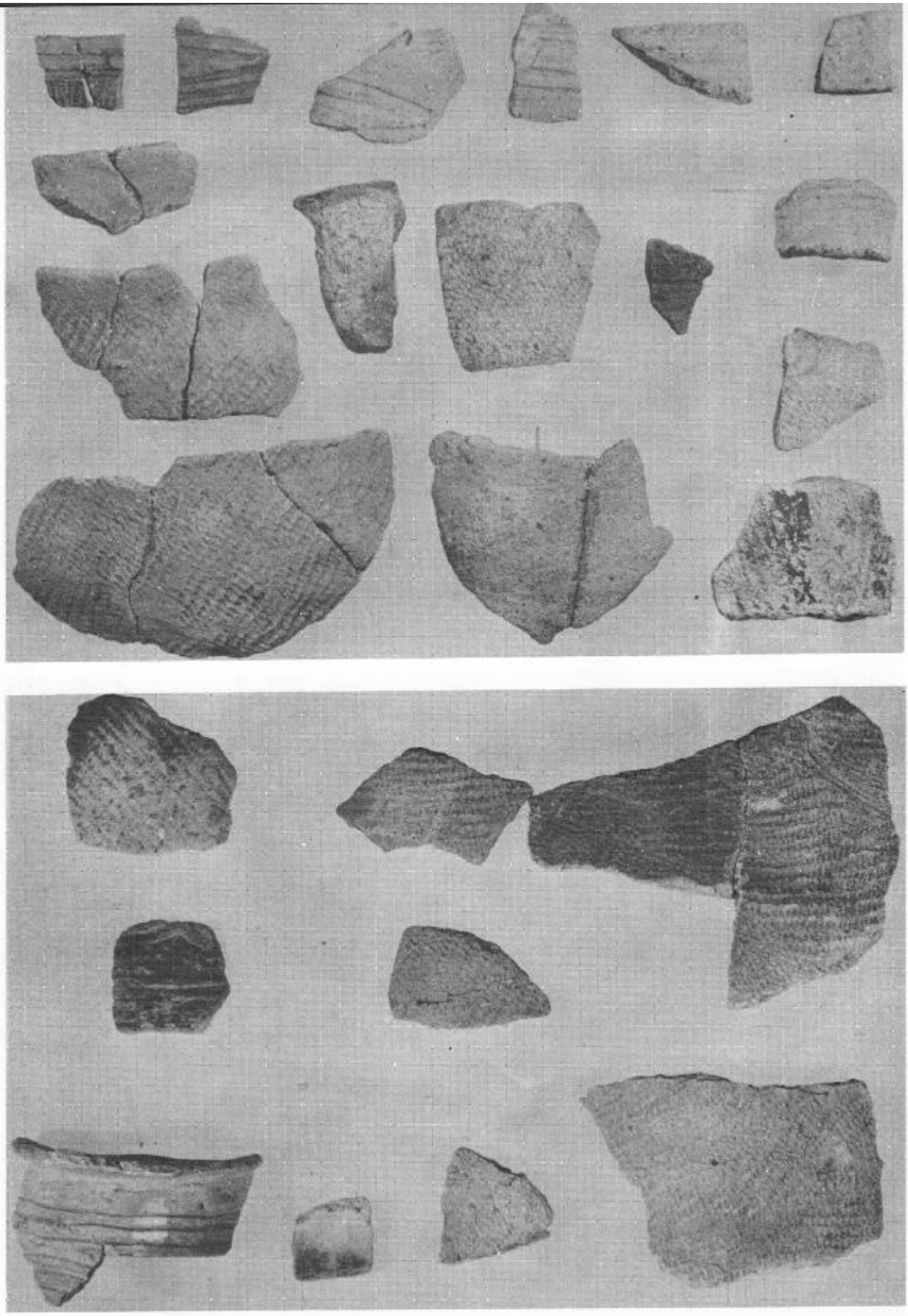


図版 5　真壁地Ｂ地区出土遺物

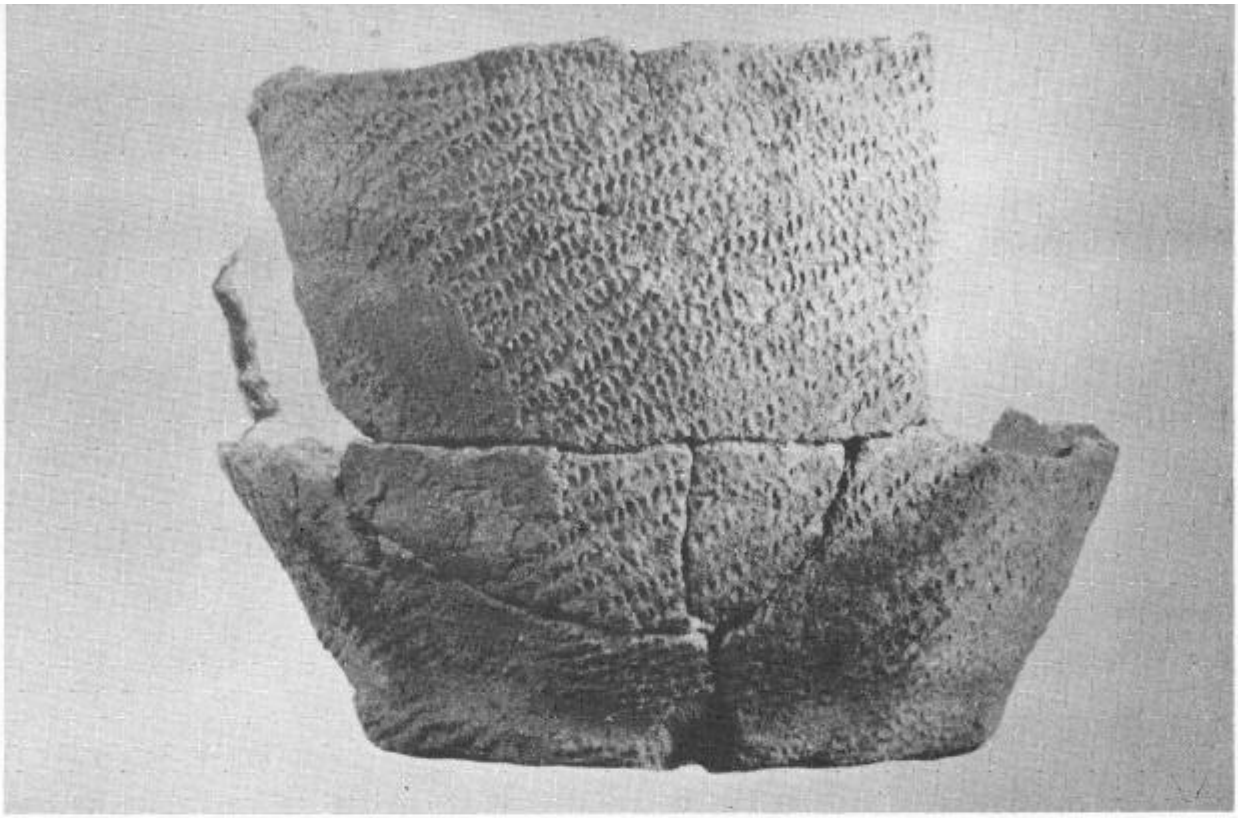


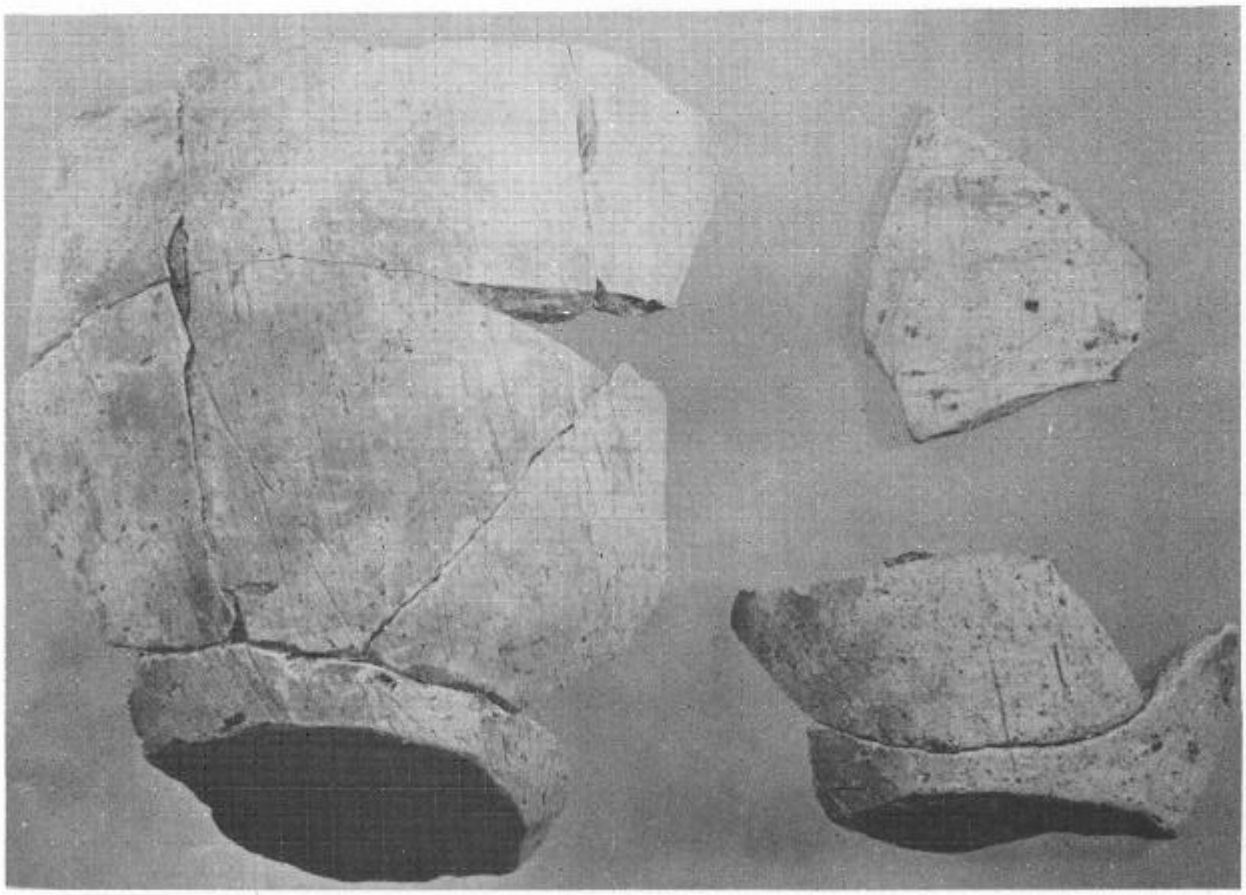


図版 6　真壁地東端出土遺物

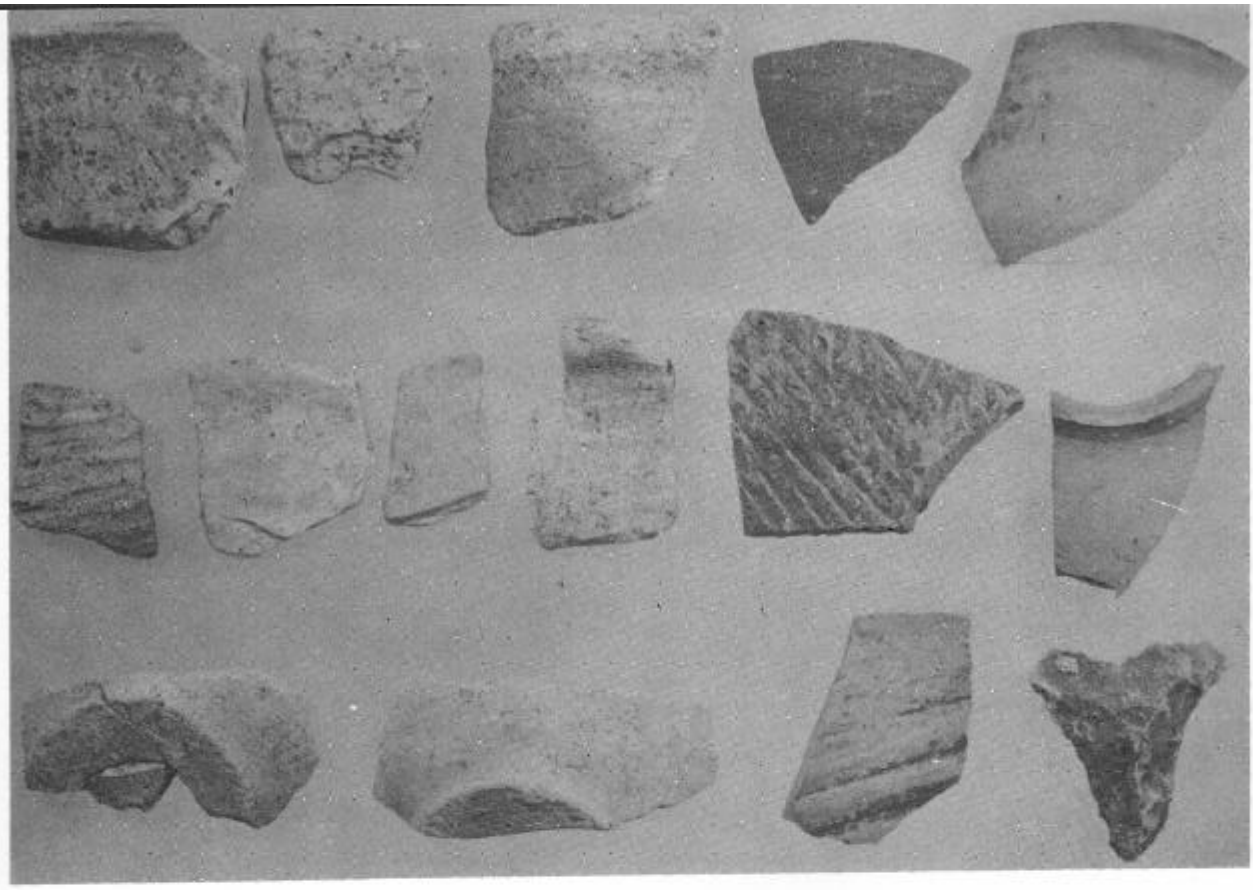


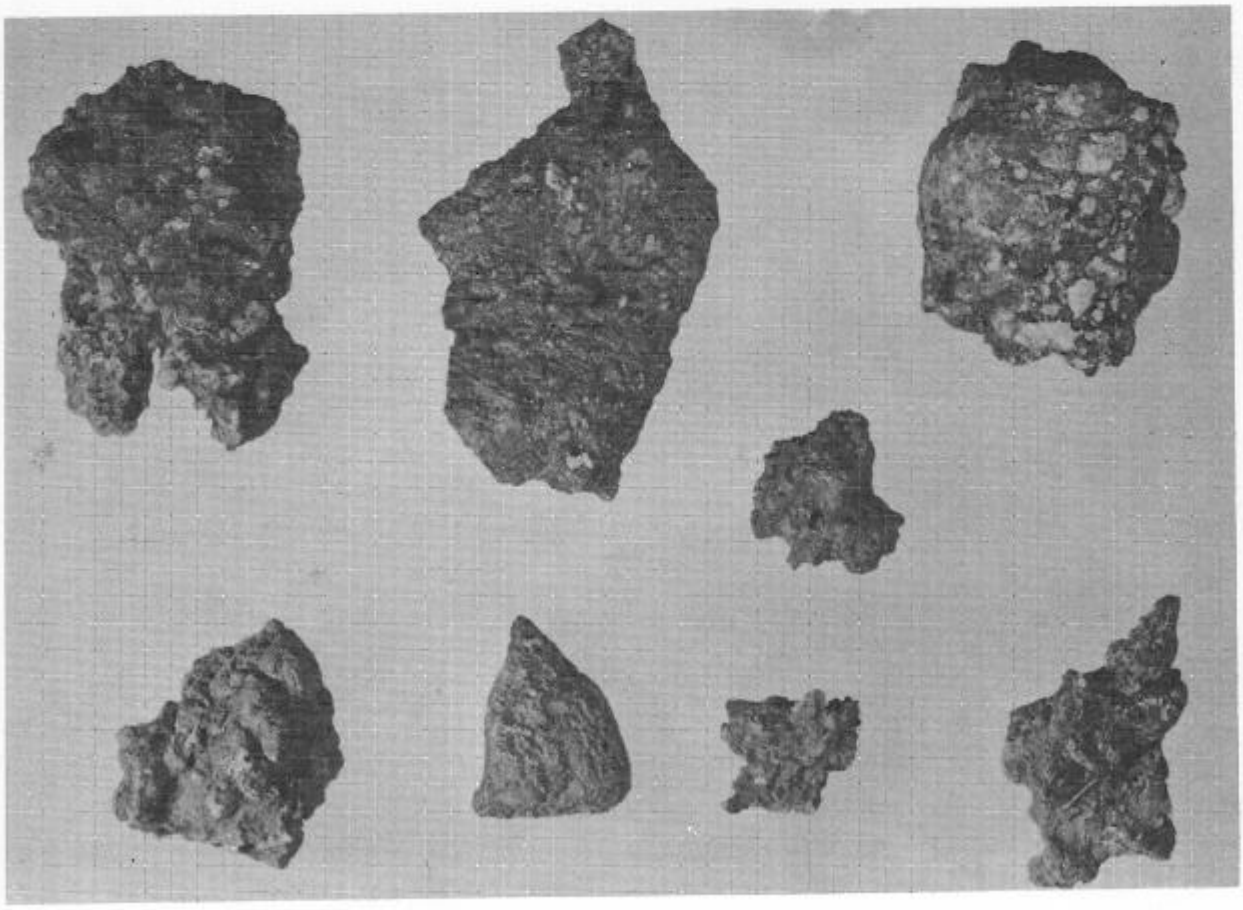
図版 7　真壁地Ｄ地区出土遺物





図版 8　上．真壁地Ｄ地区出土遺物
　　下．　〃　その他　〃





図版 9　真壁地出土遺物

四郎兵衛堤遺跡

1．所在地

能代市真壁地

2．面積

約90,000㎡

3．調査期間

昭和55年10月23日～11月２日

4．調査者

庄内昭男

5．遺跡の立地と特徴（現況）

遺跡は米代川の右岸、所謂東雲台地の南端の舌状台地上に位置している。四郎兵衛堤といわれる堤の東側台地上にある。能代農業高校裏てに通じる沢に沿った山道で遺跡は二分されており、現況は南側が雑木林・北側が杉林である。沢を隔ててサトチャシ遺跡が隣接する。

6．範囲・時代・性格

遺跡は四郎兵堤に沿った舌状台地の南端からサトチャシ遺跡に隣接する北西のつけねまで広範囲である。堤に面した南側は縄文時代後期前半の土器が出土しており、住居址らしき落ち込みを三ヶ所で確認した。山道から北側では、土師器が多く出土しており、二ヶ所よりカマド跡を検出した。サトチャシ遺跡と隣接するところから古代の集落址として大規模な遺跡が予想される。

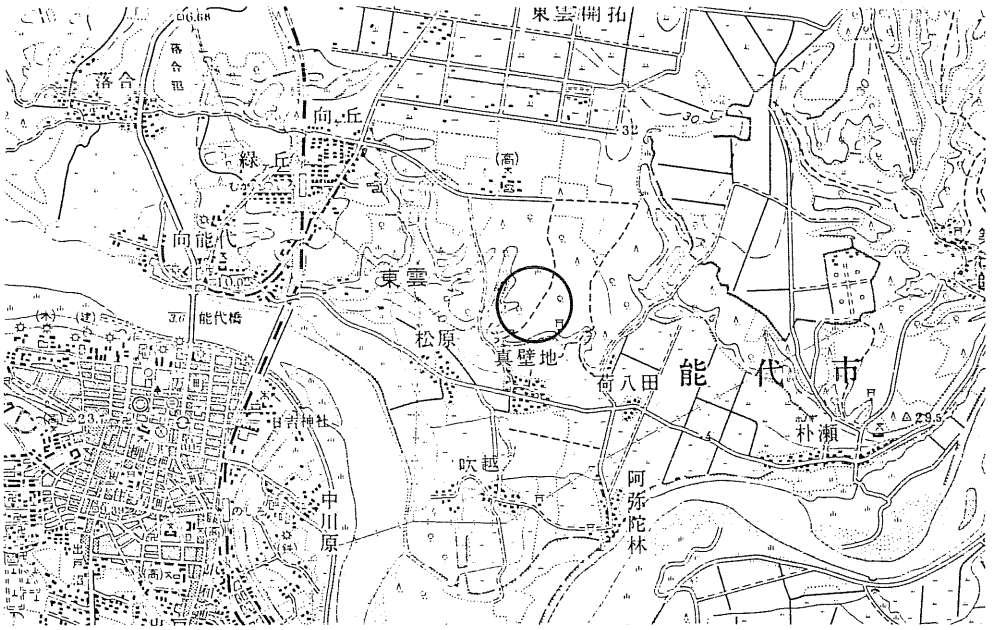
7．地層（深さ）

遺跡の南側では黒色土ないし暗褐色土が20～30㎝、北側で深く50㎝前後である。

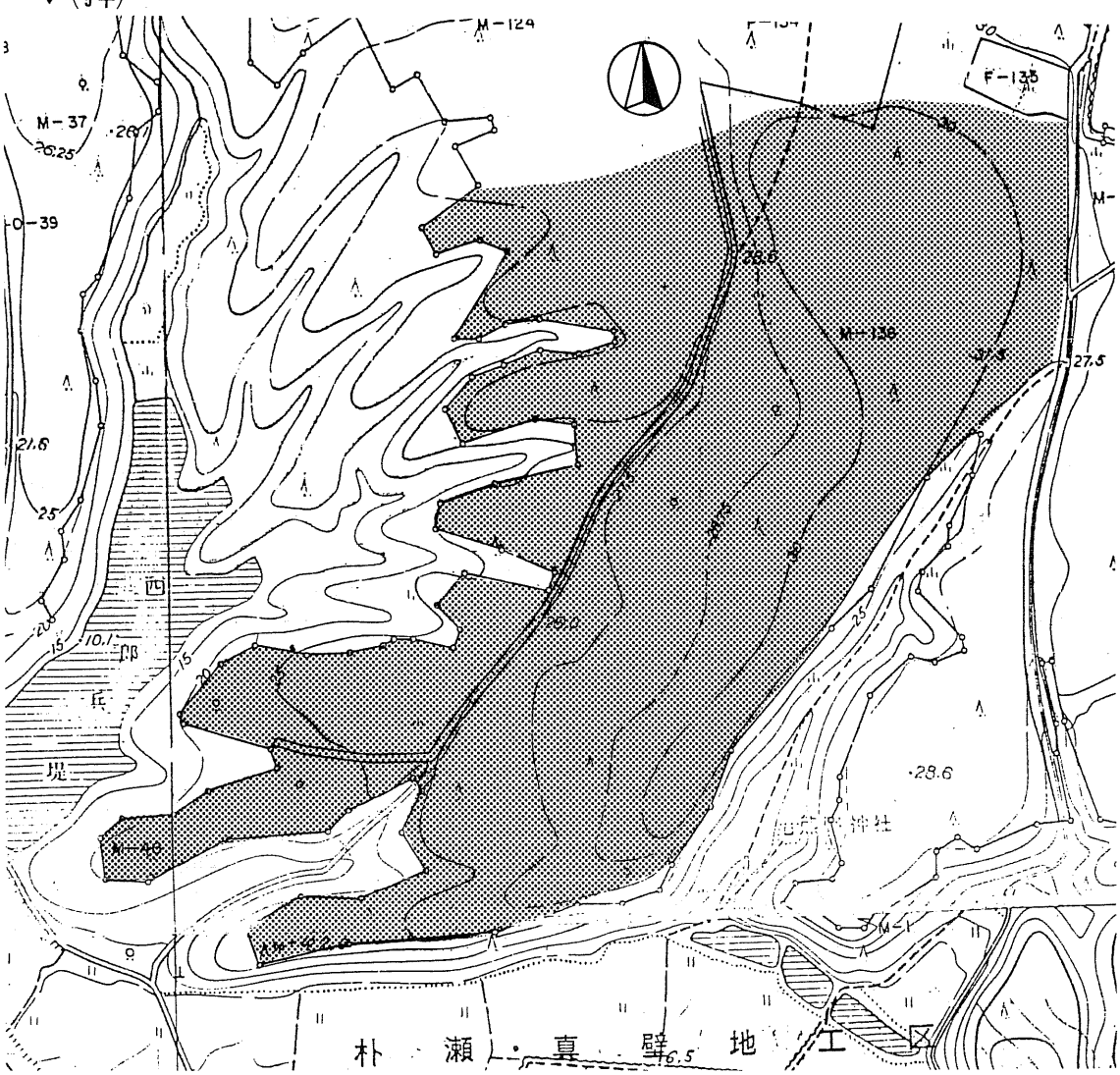
第3図

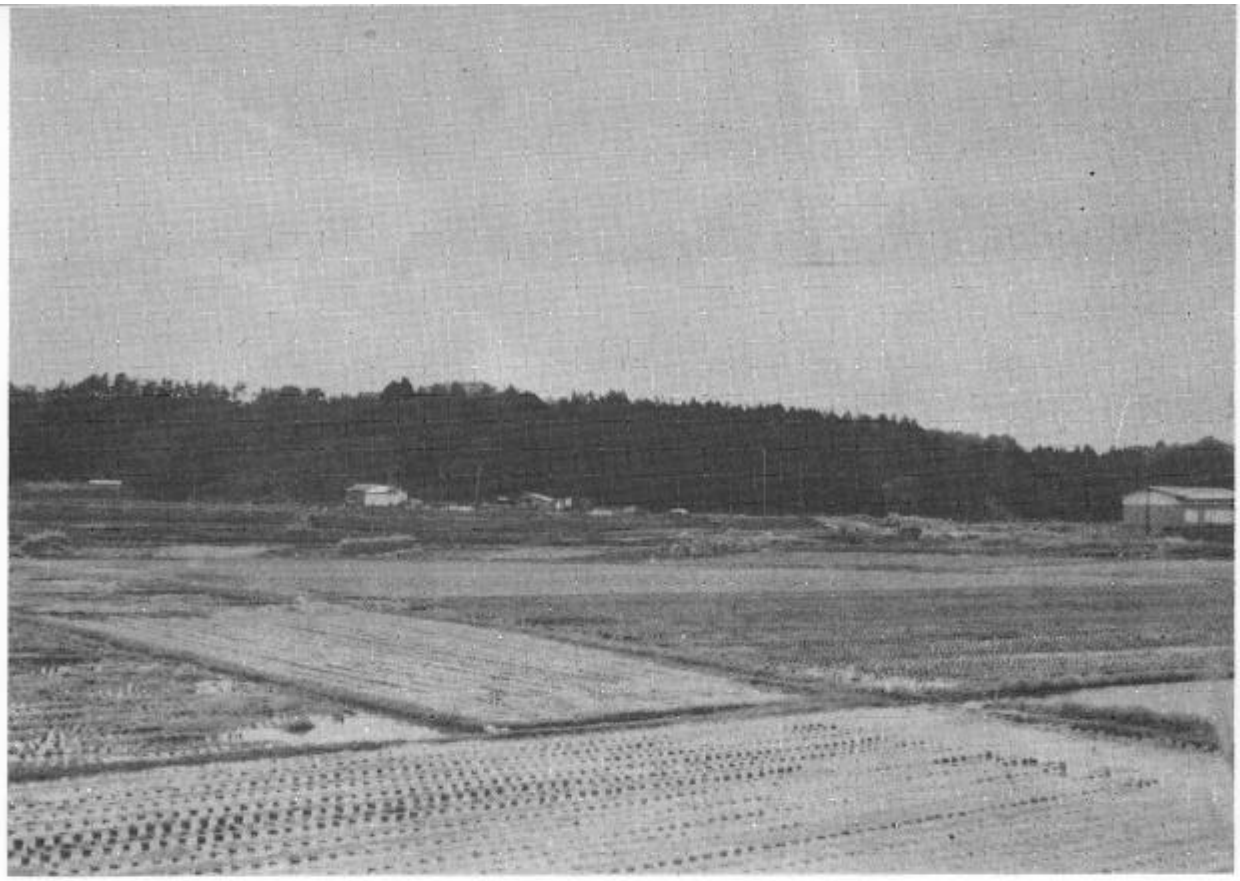
四郎兵衛堤遺跡

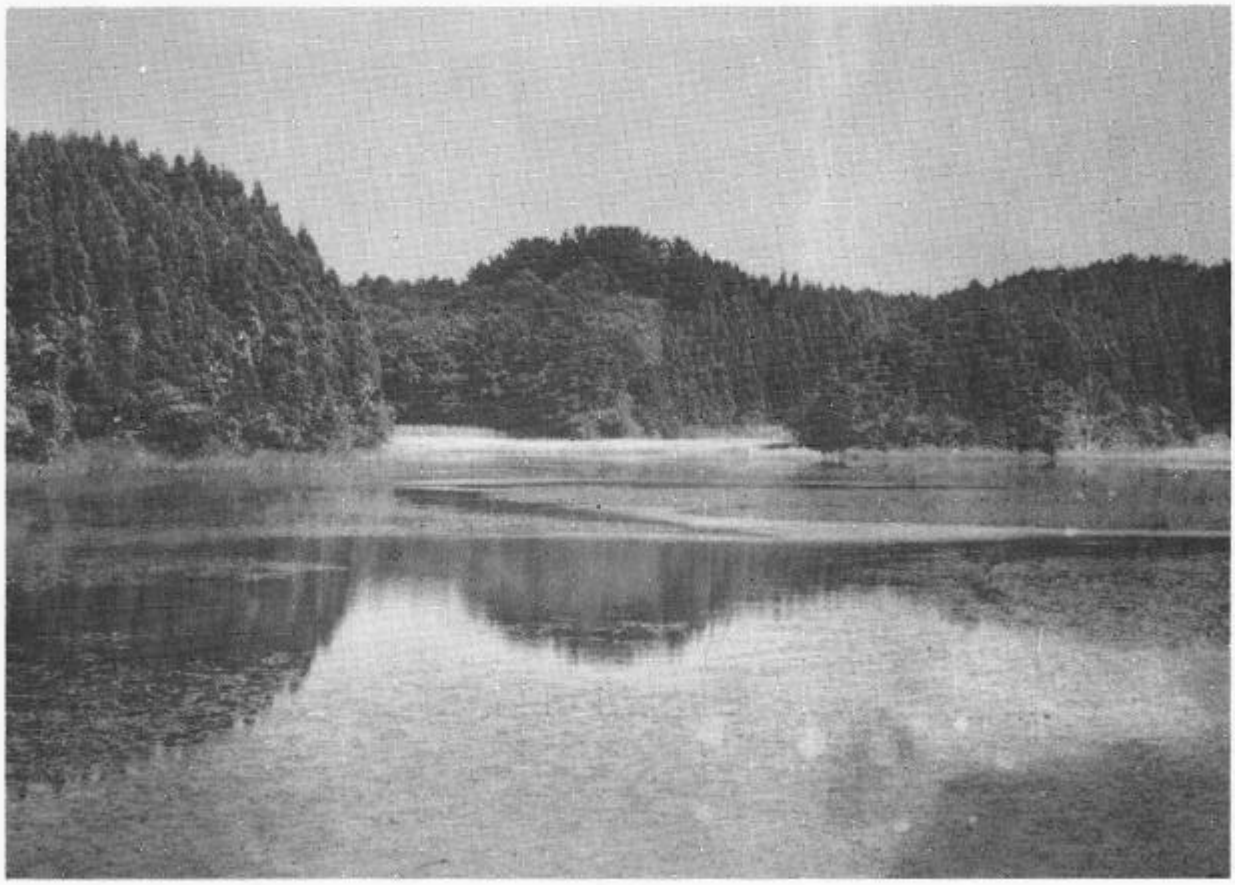
▶位置図 (1/5万)



範囲図▼ (1/5千)

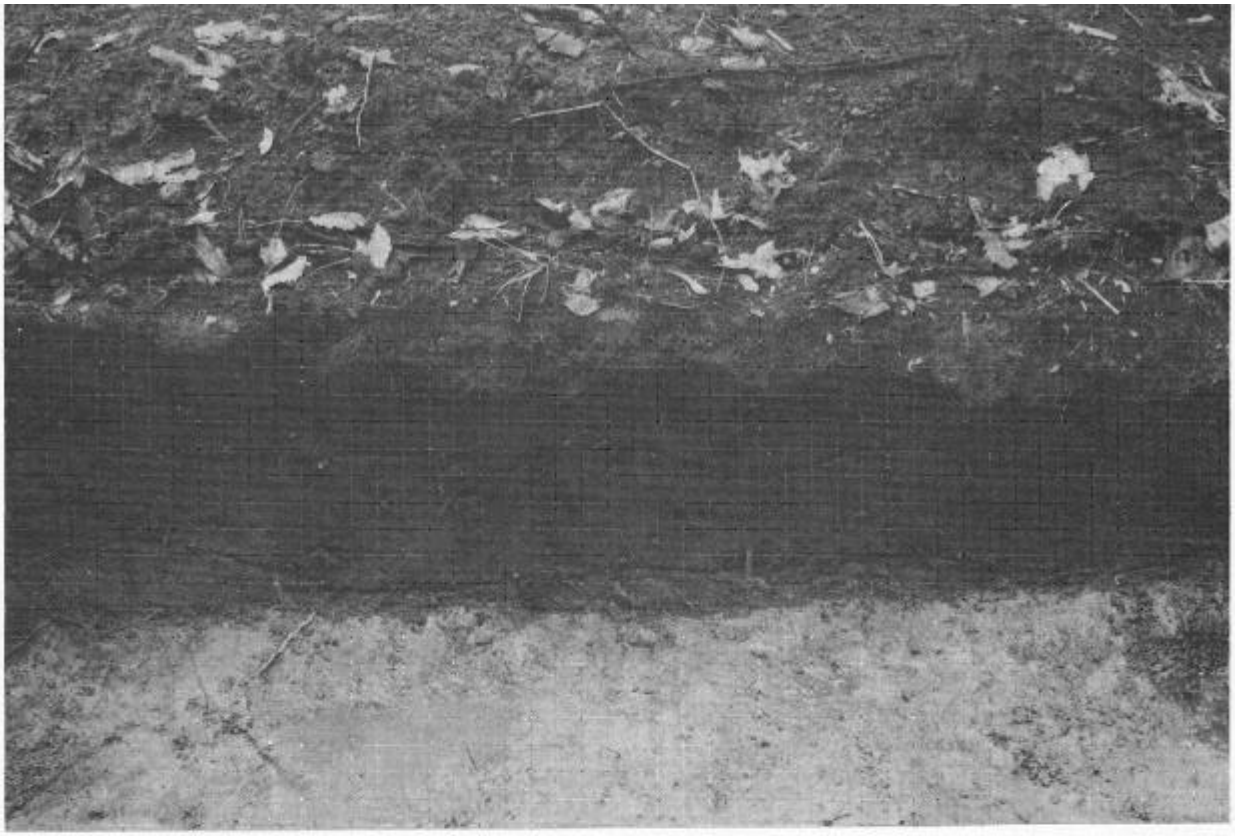


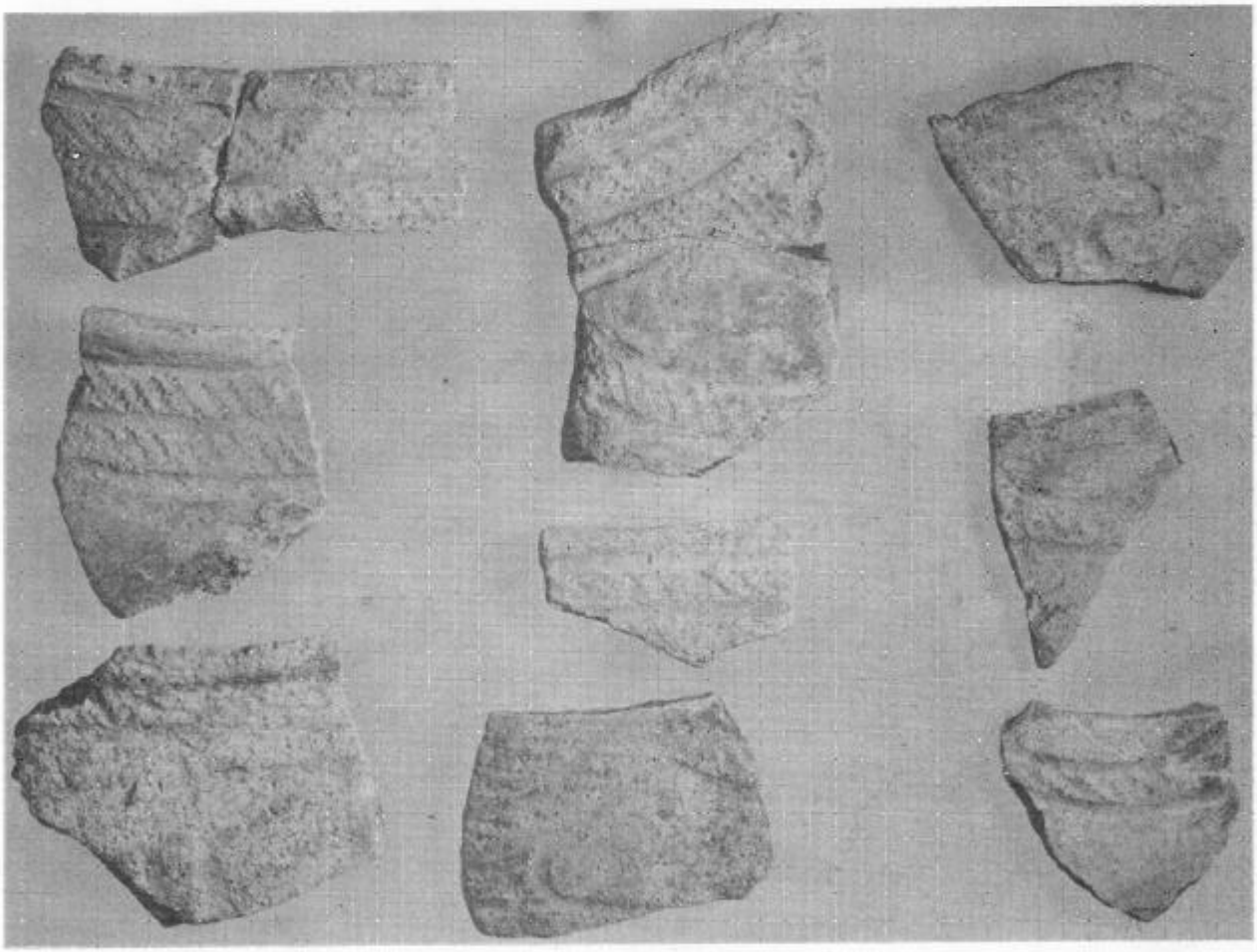




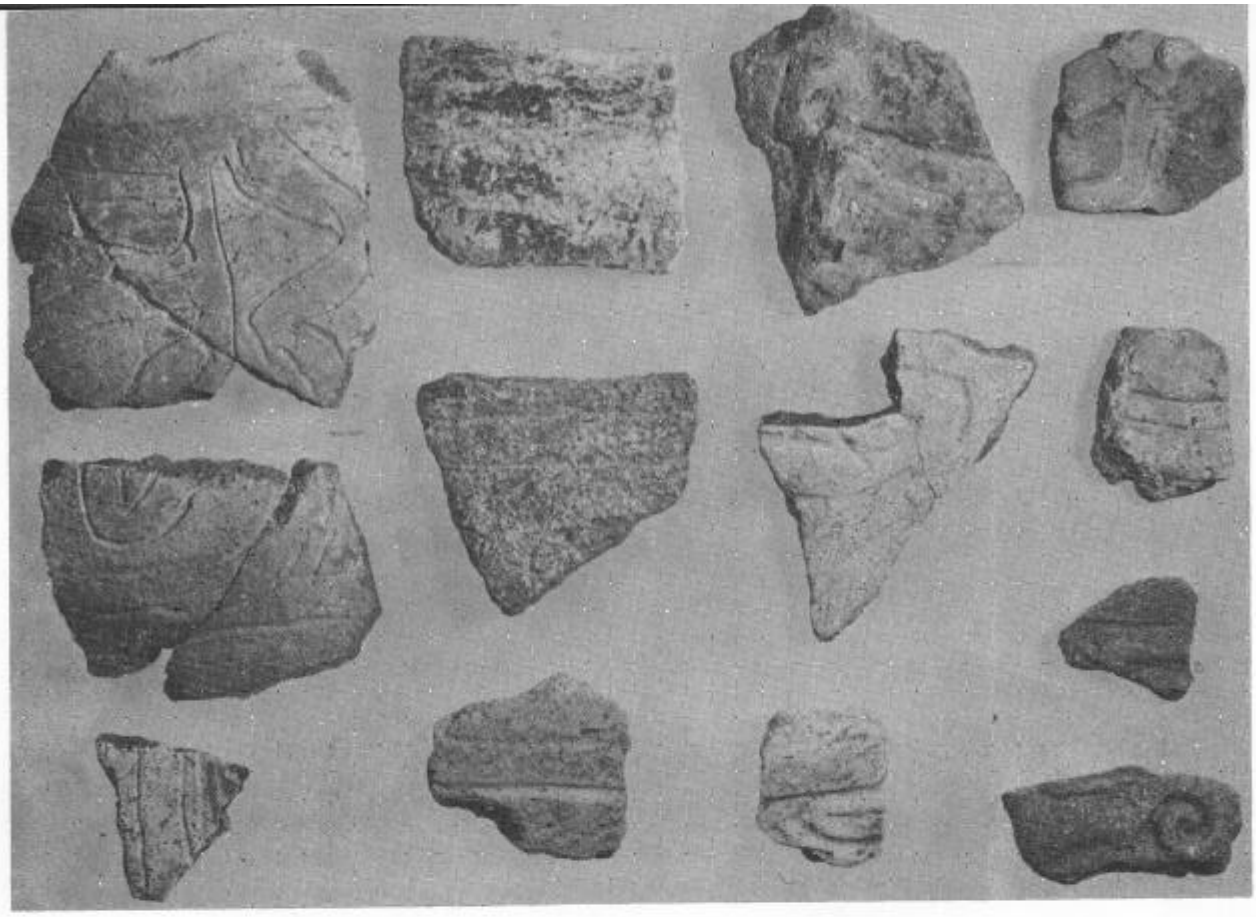
図版10　四郎兵衛堤遺跡遠景

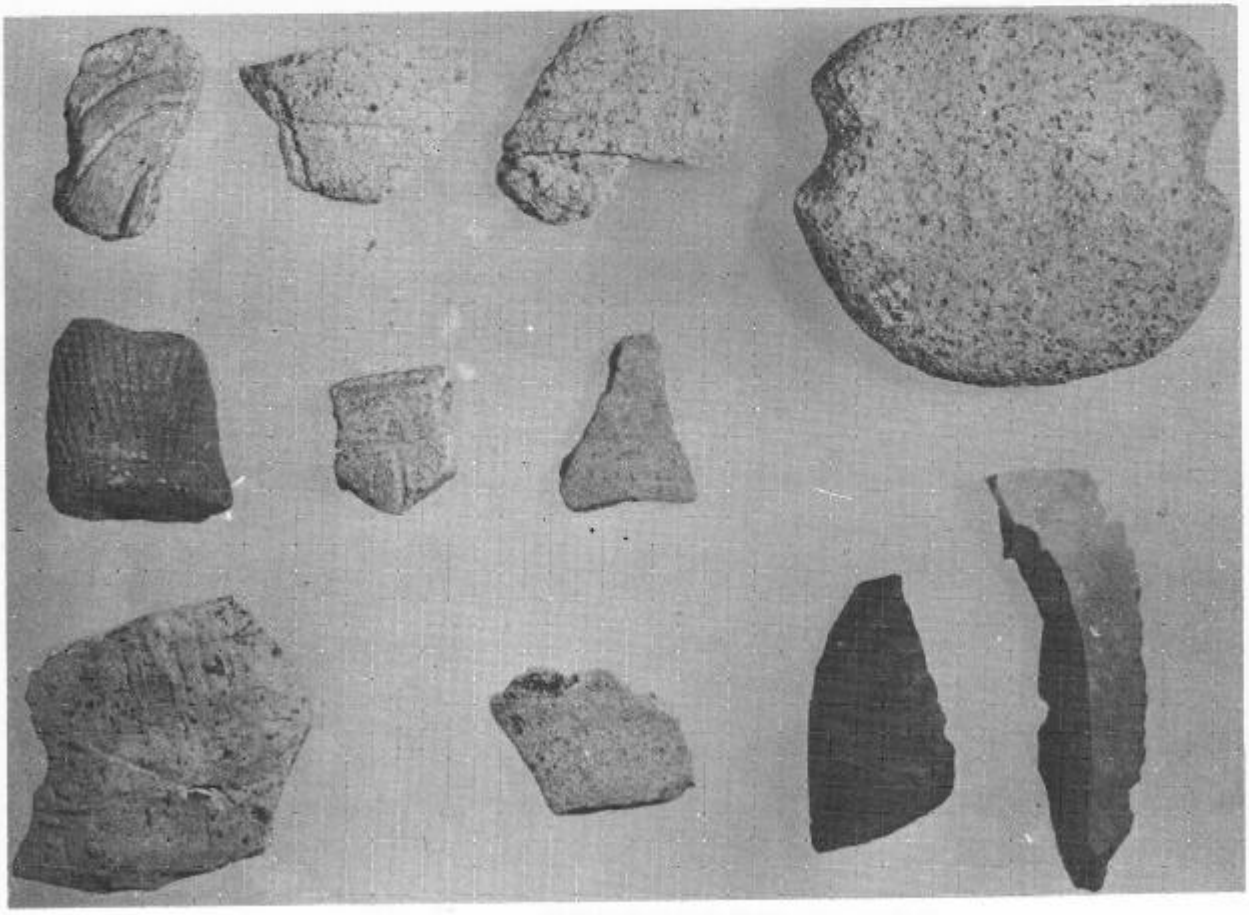
図版11　四郎兵衛堤遺跡遺構



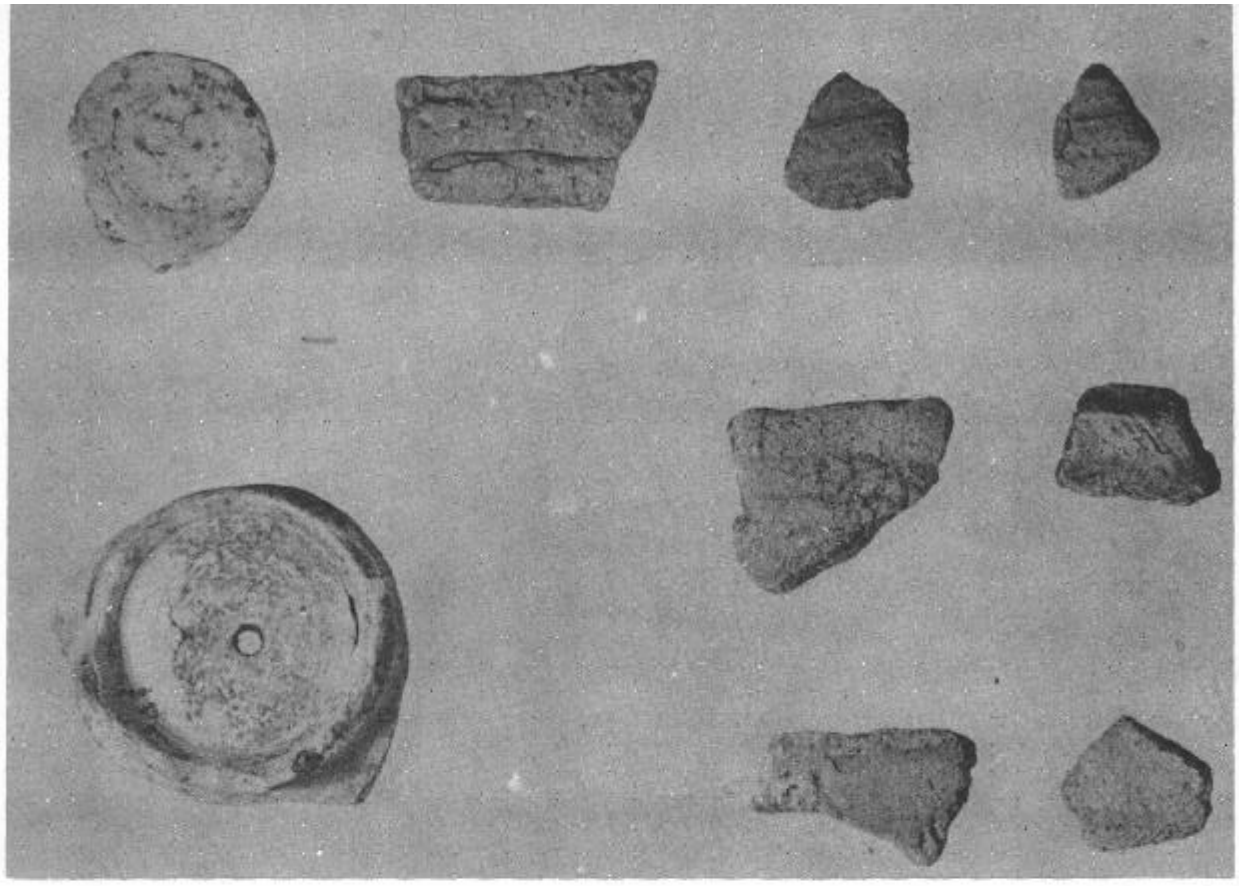


図版12　上．四郎兵衛堤遺跡遺構
　　下．　〃　　出土遺物





図版13　四郎兵衛堤遺跡出土遺物



図版14　四郎兵衛堤出土遺物

平鹿遺跡

1．所在地

平鹿郡増田町増田字平鹿

2．面　積

約25,000m²

3．調査期間

昭和55年11月6日～12日

4．調査者

畠山憲司・三嶋隆儀

5．遺跡の立地と特徴（現況）

遺跡は成瀬川の右岸、真人扇状地の扇央部に位置する。真人扇状地は東から西に漸次下降し、遺跡周辺はほぼ平担である。標高は約 114m。現在水田と一部果樹園（リンゴ）である。

6．範囲・時代・性格

遺物は広範囲に散布するが、端に行くにつれ耕地整理等での攪乱を受けており、中心部にくらべ良好な遺物包含層は存在しない。遺物は縄文時代晩期中葉後半から末葉にかけてのもので、遺構は同期の埋甕（埋設土器）、集石遺構、土坑などがある。これ以外の時期の遺構・遺物はなく、本遺跡は縄文時代晩期後半を中心とする集落遺跡と考えられる。

7．地　層

調査した地点により大きな差がある。中心部ほど第1層（耕作土及びその表土）が厚く30～50cmほどある。第2層黒色土層が晩期末葉の遺物包含層で、約20cm、第3層暗褐色土層及び漸移層が10～30cmで、晩期中葉後半の遺物包含層、その下が地山上となっている。

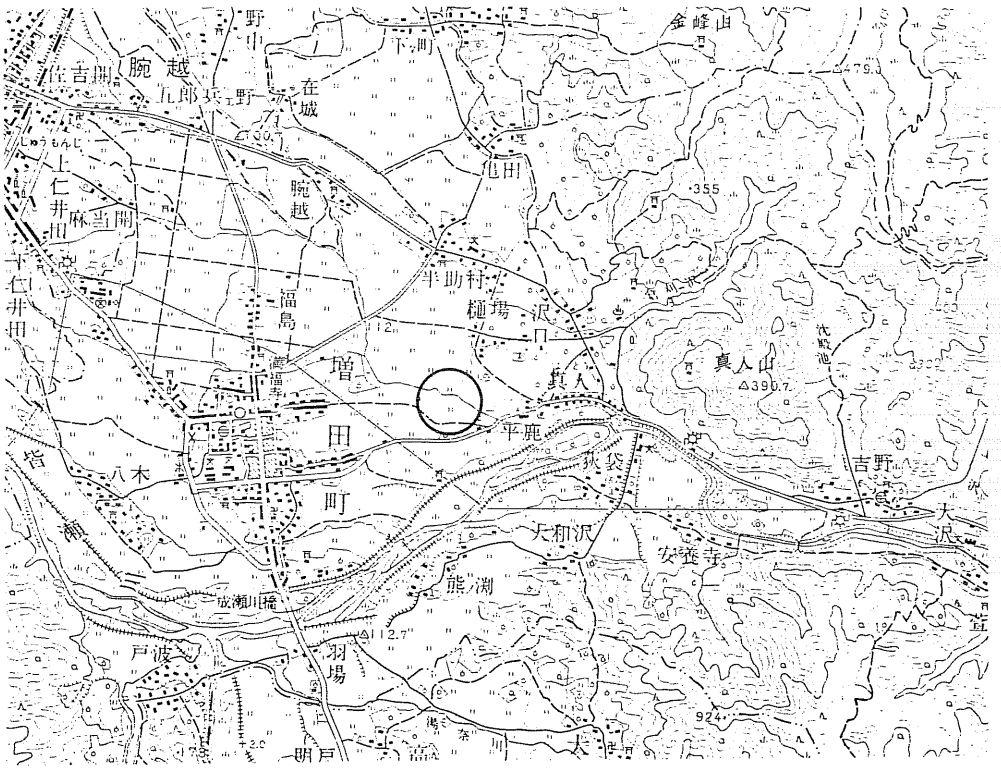
8．その他の特記事項

かつて山下孫継氏が発掘調査を行っている。この時や、耕作時に晩期後半の土器の優品が多く出土している。

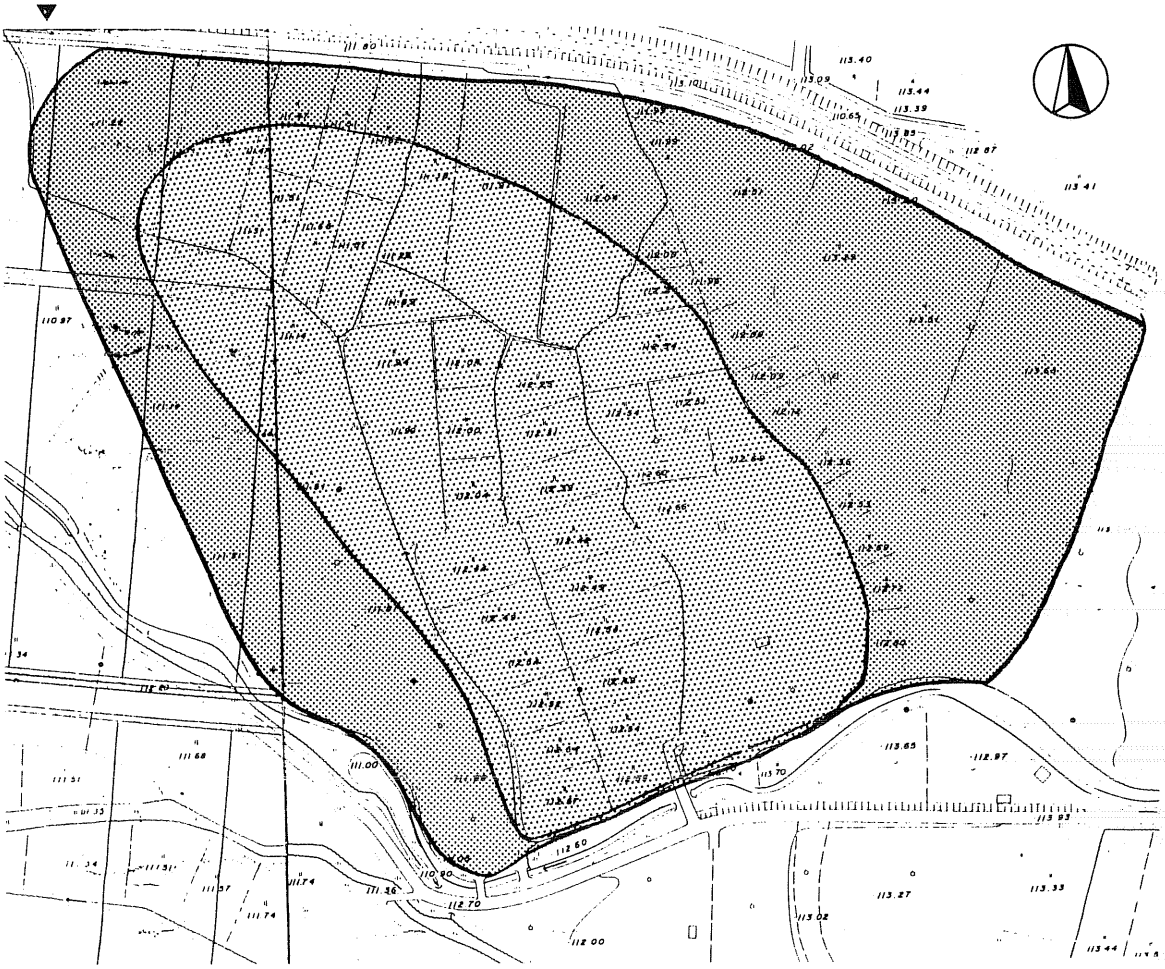
第4図

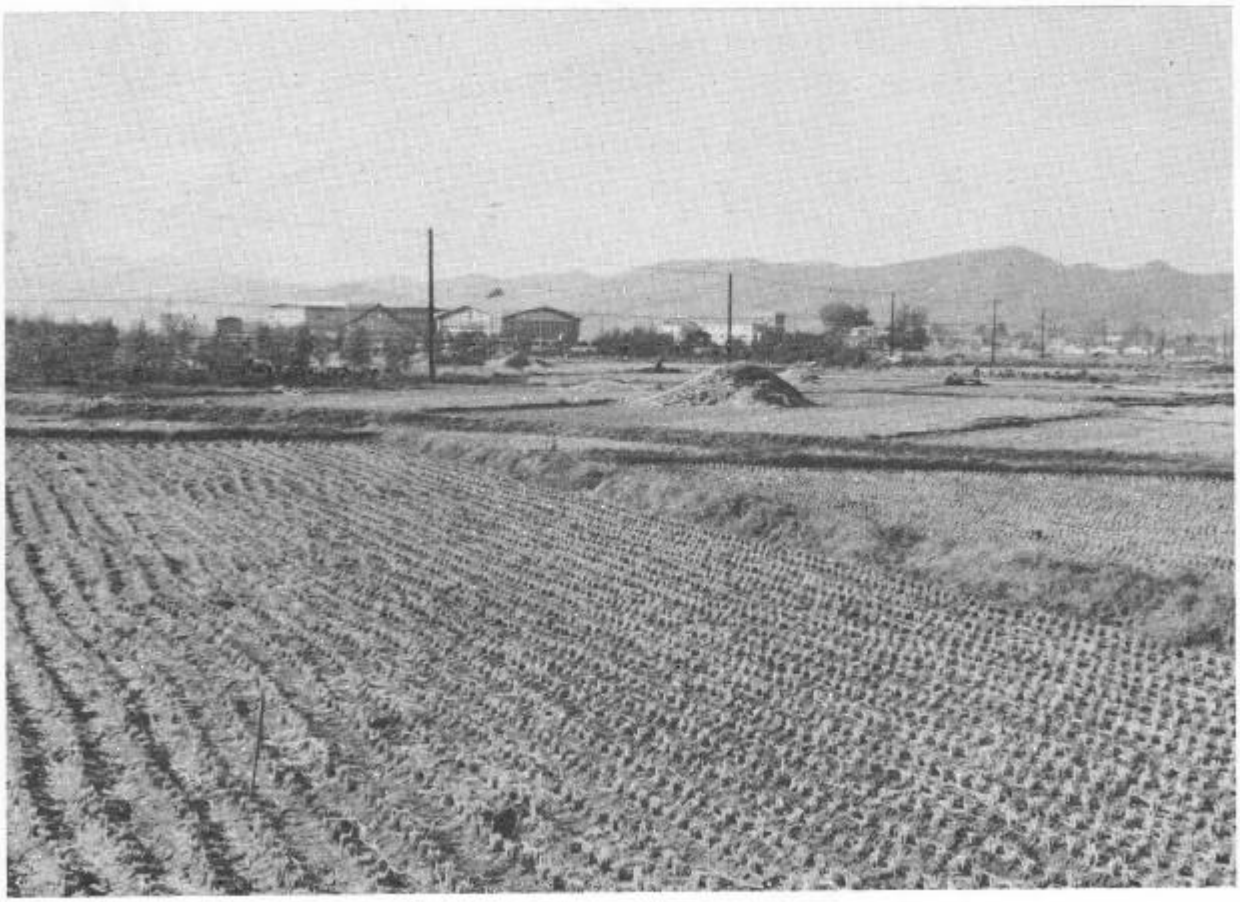
平鹿遺跡

▶位置図 (1/5万)



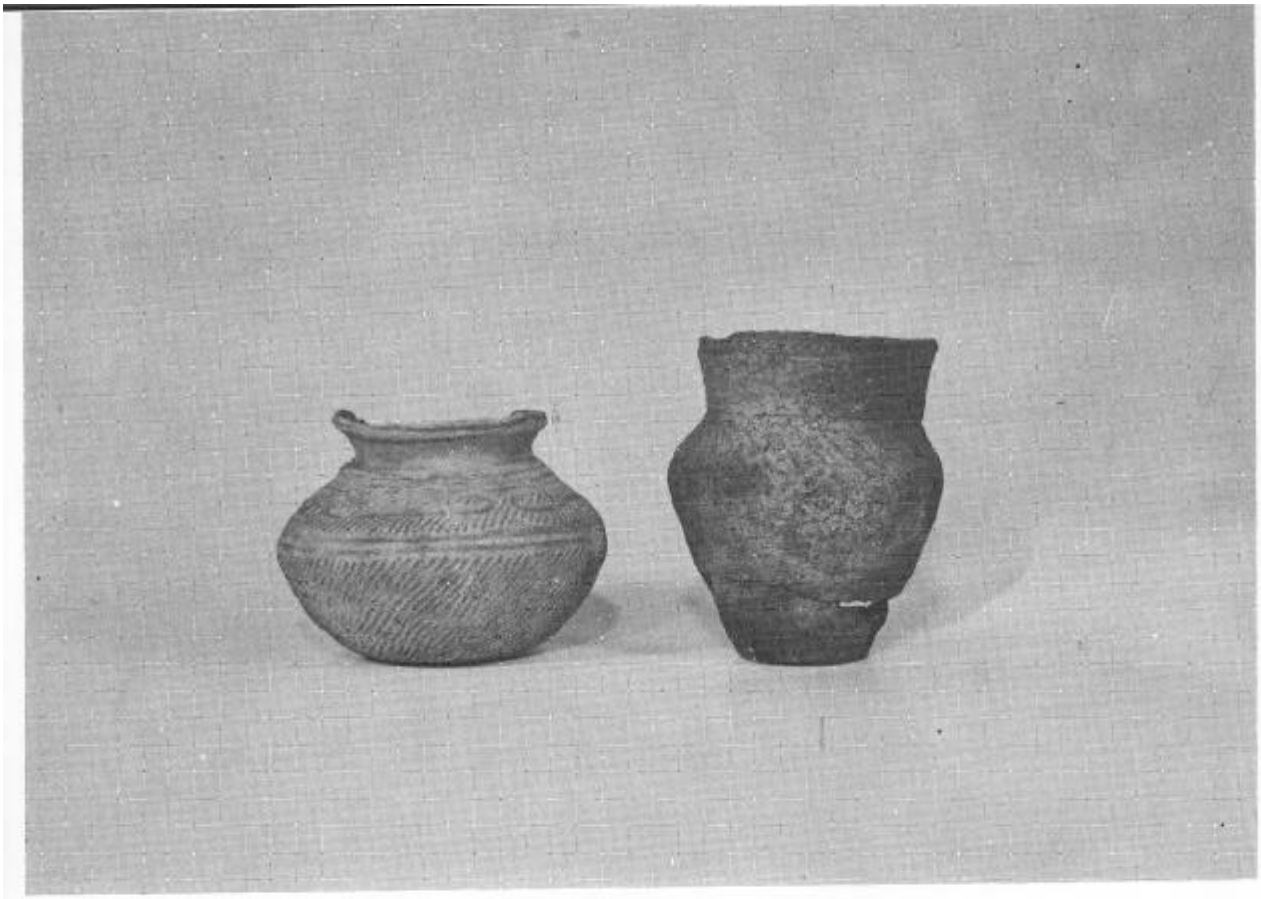
範囲図 (1/2千)

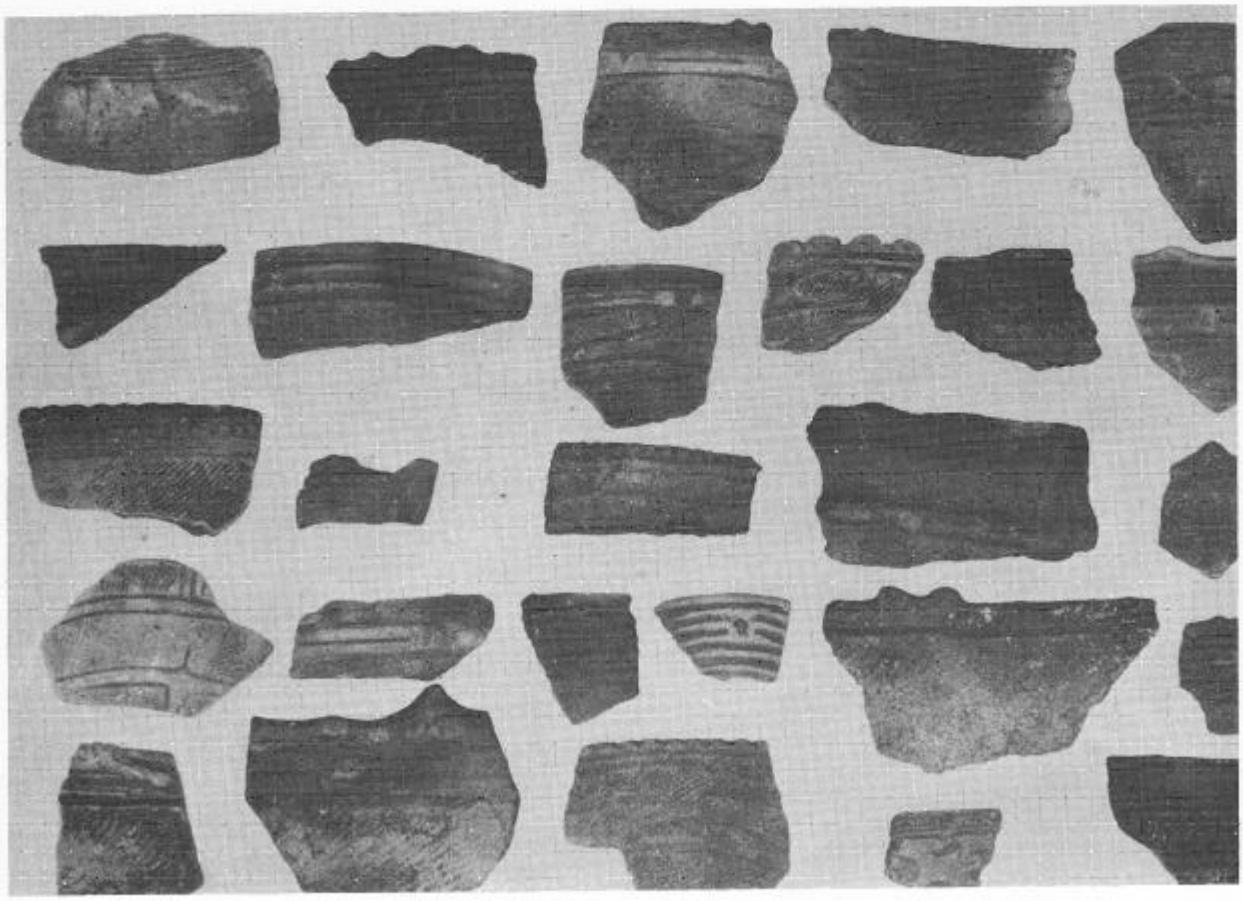




図版15　平鹿遺跡遠景

図版16　平鹿遺跡　上．埋甕
〃　　下．遺構





図版17　平鹿遺跡出土遺物　平鹿 3

大深Ⅰ・Ⅱ遺跡

1．所在地

仙北郡田沢湖町田沢字大深

2．面　積

約20,000㎡（大深Ⅰ1,300㎡・大深Ⅱ7,000㎡）

3．調査期間

昭和55年10月22日～11月1日

4．調査者

高橋忠彦・高橋浩樹

5．遺跡の立地の特徴（現況）

遺跡は玉川と支流の小和瀬川との合流点より、南東側の標高 380m前後の河岸段丘上に位置する。現況は、畑・水田・家屋の跡地である。

6．範囲・時代・性格

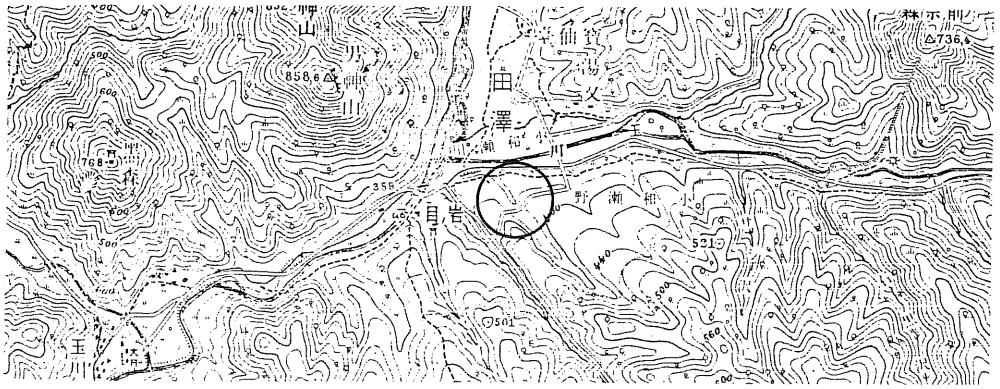
昭和20年代後半に開田事業が行なわれており、その際には多数の土器が出土らしいが、現在は、地山（ローム）が露出する部分が多く、縄文中期と思われる土器片が10点ほど出土したにすぎない。

7．地層（深さ）

深い所で15cmほどの表土（耕作土）が存在するだけである。遺物包含層遺構とも破壊されたものと考えられる。

第5図　大深Ⅰ・Ⅱ遺跡

▶置図 $\left(\frac{1}{5万}\right)$



範囲図▼ $\left(\frac{1}{1千}\right)$

図版18

大深遺跡遠景

スポーツ・ゾーン関係遺跡

1．所在地

河辺郡雄和町椿川字駒坂袋

2．面　積

A．　2,500㎡・B．　2,500㎡・C．　2,500㎡・D．　400㎡

3．調査期間

昭和55年12月１日～５日

4．調査者

富樫泰時・畠山憲司・庄内昭男・高橋忠彦

5．遺跡の立地と特徴

県立中央公園計画地内に設けられるスポーツ・ゾーン建設予定地は雄和町と河辺町の境界にある標高約80ｍの台地上にある。北は岩見川、南が安養寺川にはさまれた舌状の大きな台地で西に広くのび、西端は椿台と呼ばれる。椿台ゴルフ状を突切って東に進むと広々とした農業試験場がある。そこを左に見てさらに東に進むと右側に草地が目にはいる。この草地がスポーツ・ゾーン建設予定地である。南に面した台地で、安養寺川側（南）から小さな谷がいくつか入りこみ、ゆるやかな起伏をなす。現況は草地。

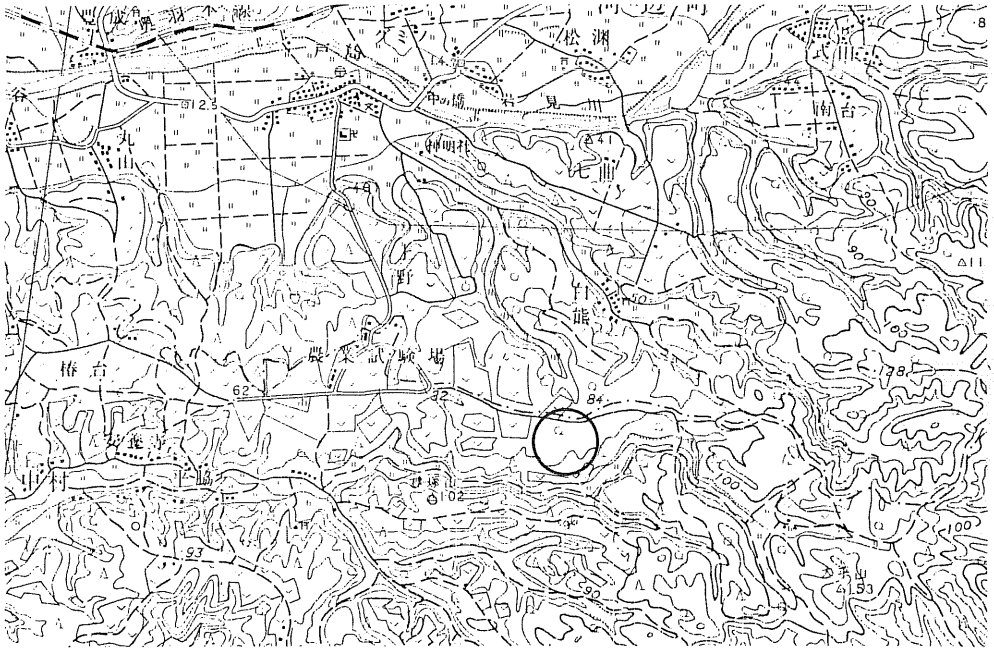
6．時代・範囲・性格

台地の起伏のある台地上に遺跡が４ヶ所発見された。いずれも範囲はせまく、小さな遺跡と考えられる。Ａ地区は縄文時代後期前葉の土器片・焼土遺構などが確認された。Ｂ地区も同様後期前葉の土器片・土坑などが確認された。Ｃ地区は東端に近い所で後期前葉の土器が竪穴住居跡（？）の中から発見された。Ｄ地区はＣ地区の東側で一段低くなった所で確認された。遺構などについては不明。

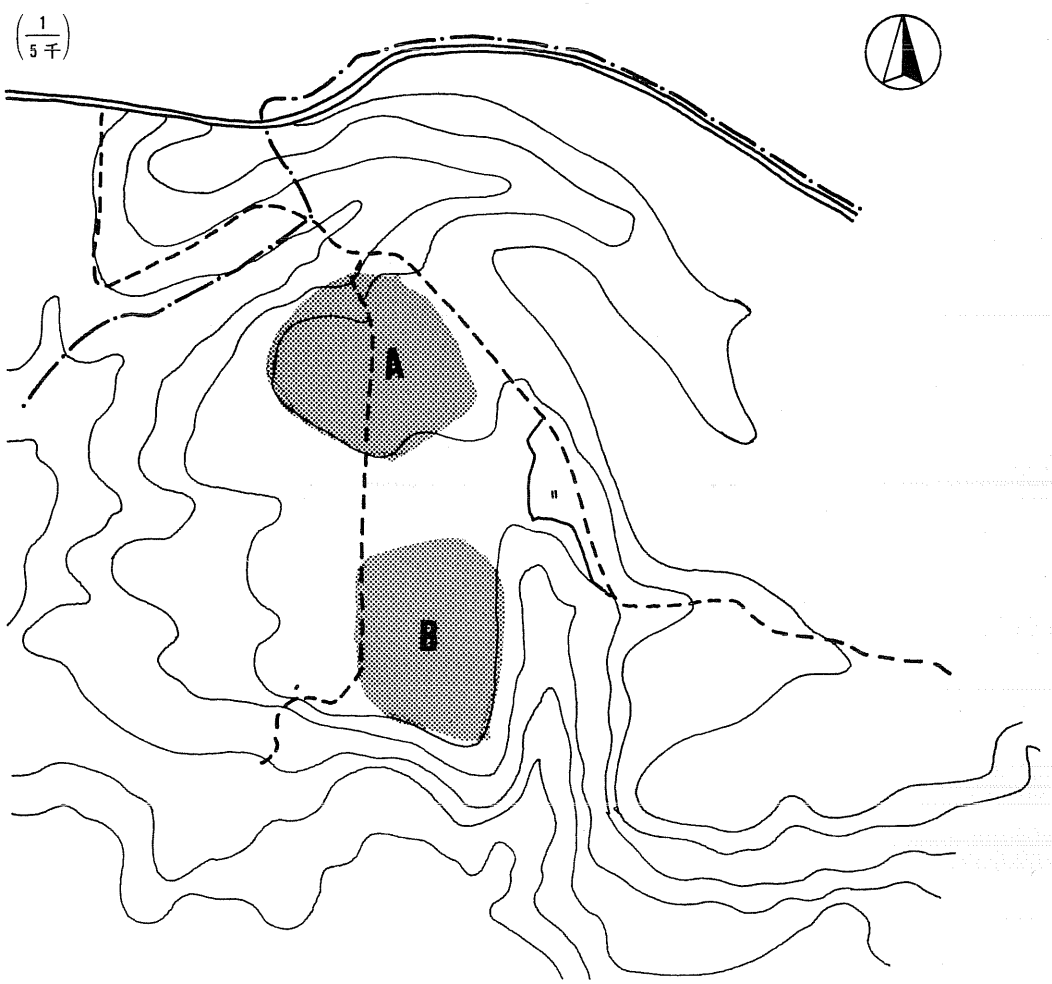
このような調査の結果から、本遺跡群は縄文時代後期前葉の小遺跡（竪穴住居跡数軒か？）が小さい舌状台地を利用して生活した場所と考えられる。

第6図　スポーツ・ゾーン

▶位置図 $\left(\frac{1}{5万}\right)$



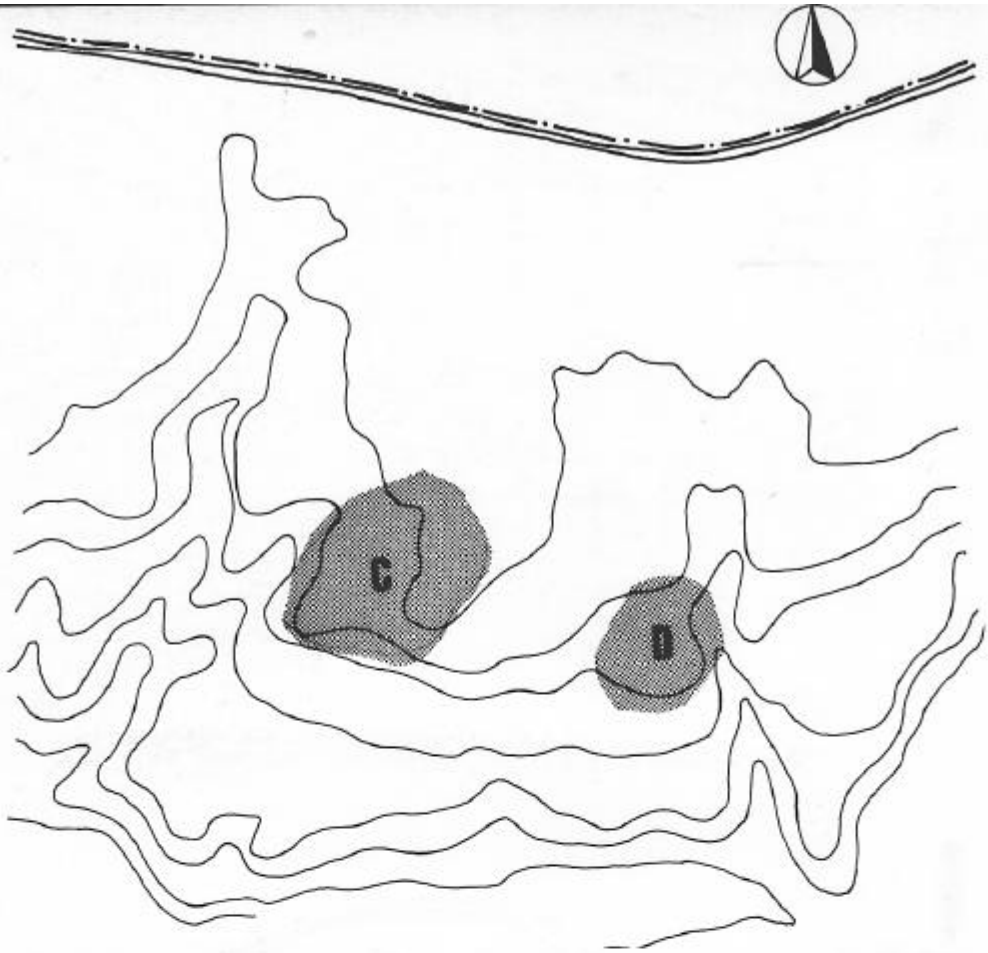
範囲図▼ $\left(\frac{1}{5千}\right)$

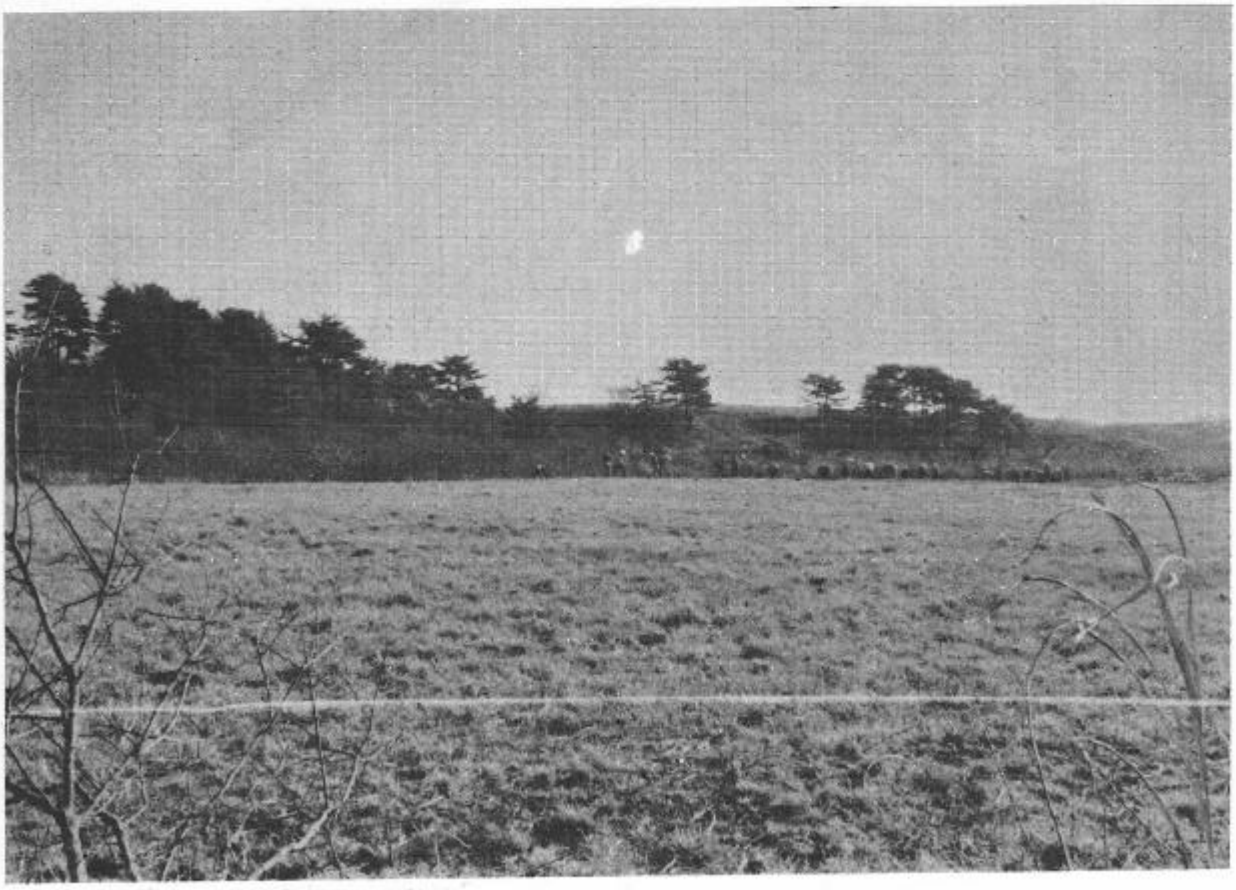


第7図

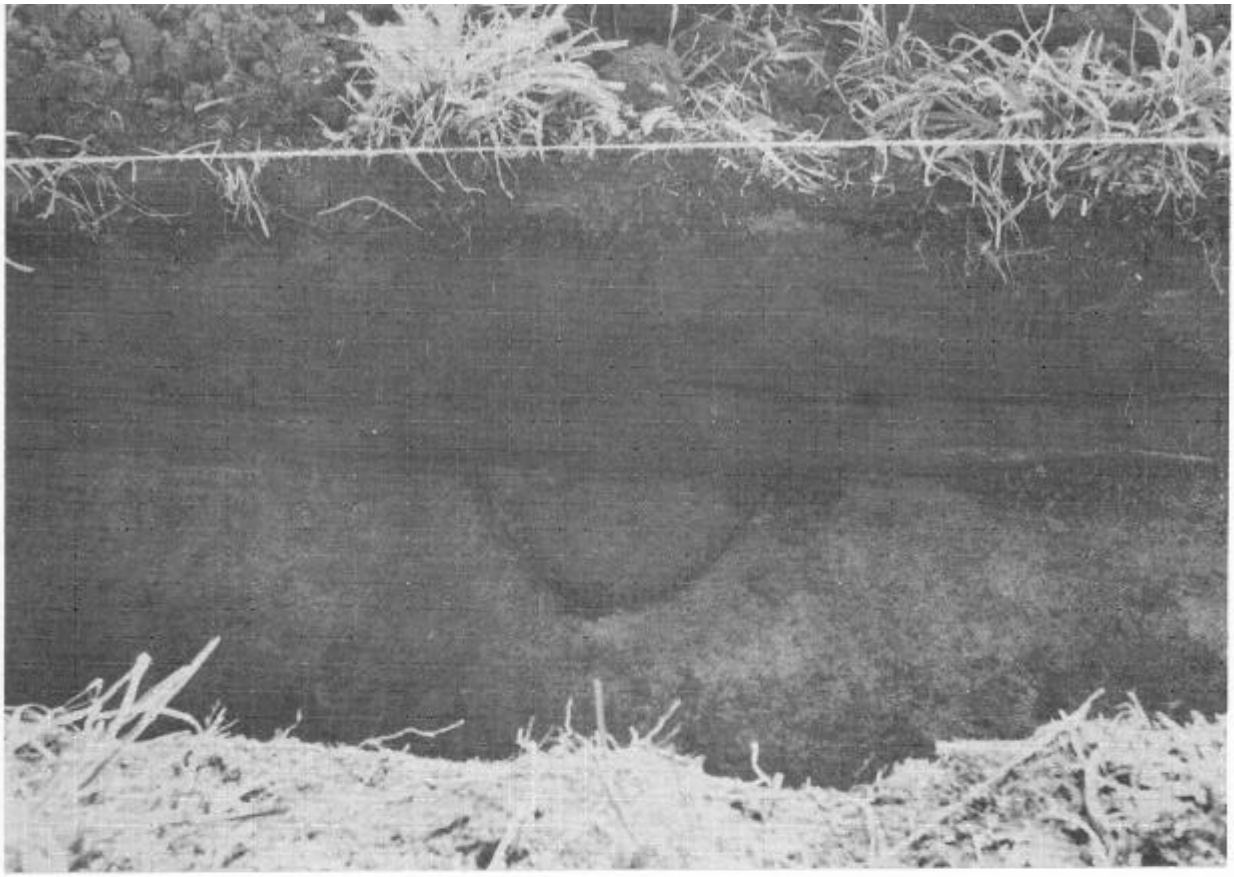
範囲図▶

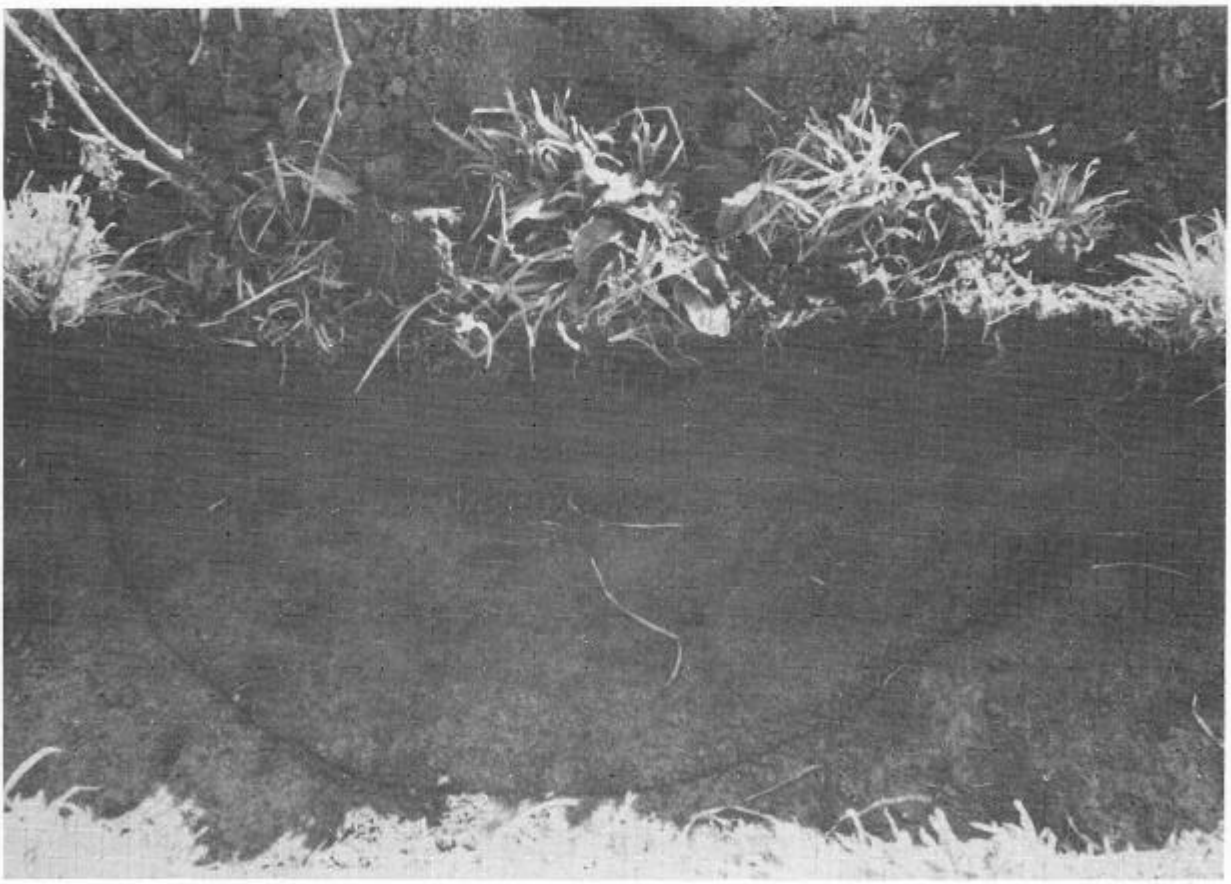
$\left(\frac{1}{5千}\right)$



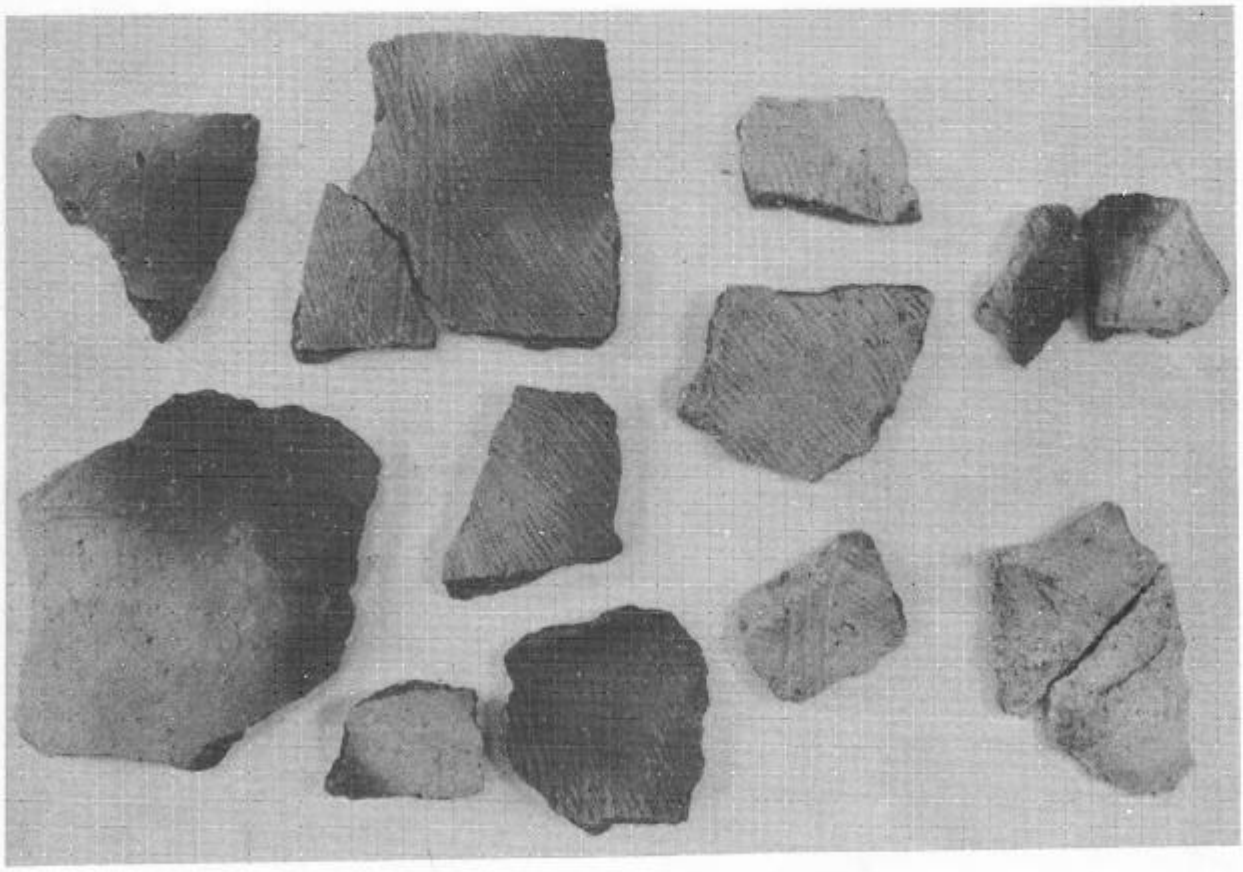


図版19　スポーツ・ゾーン遺跡遠景

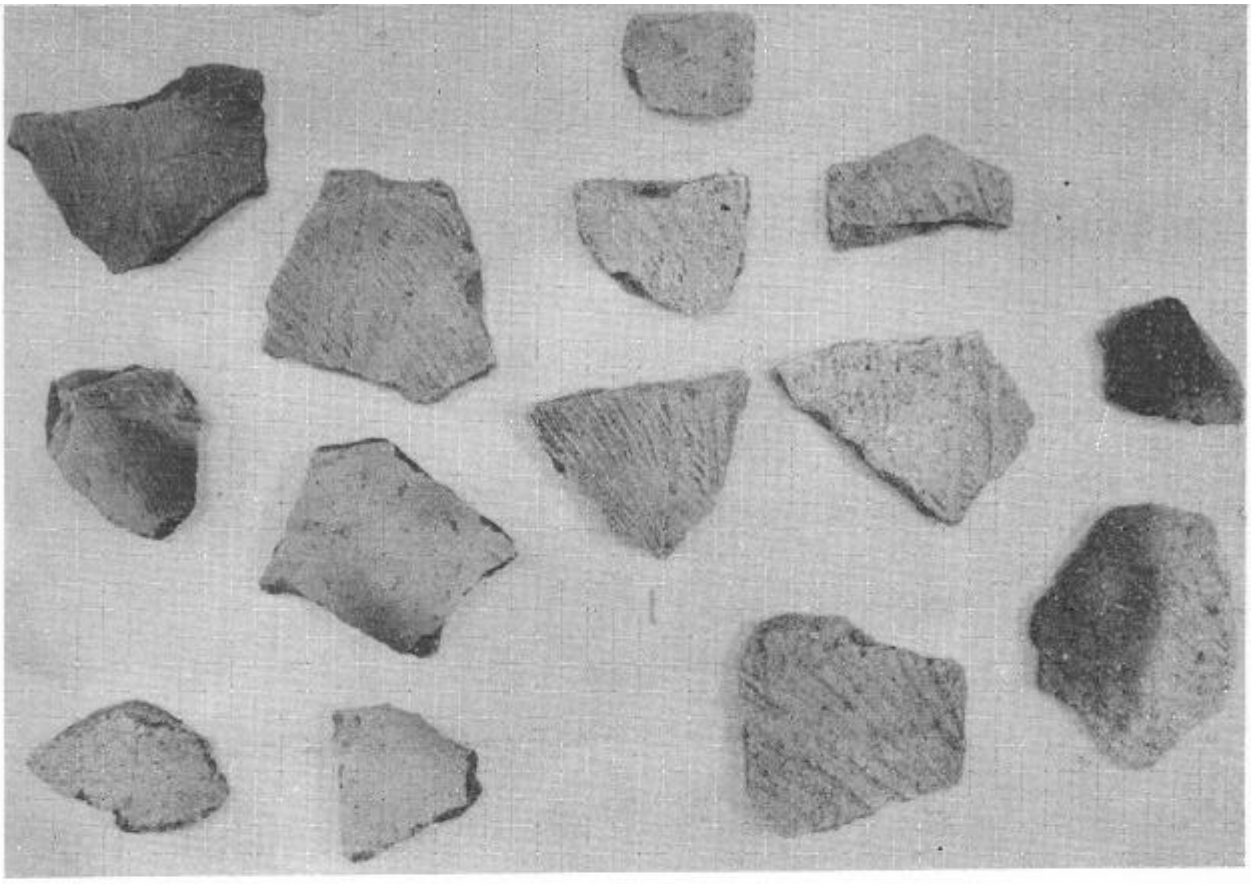


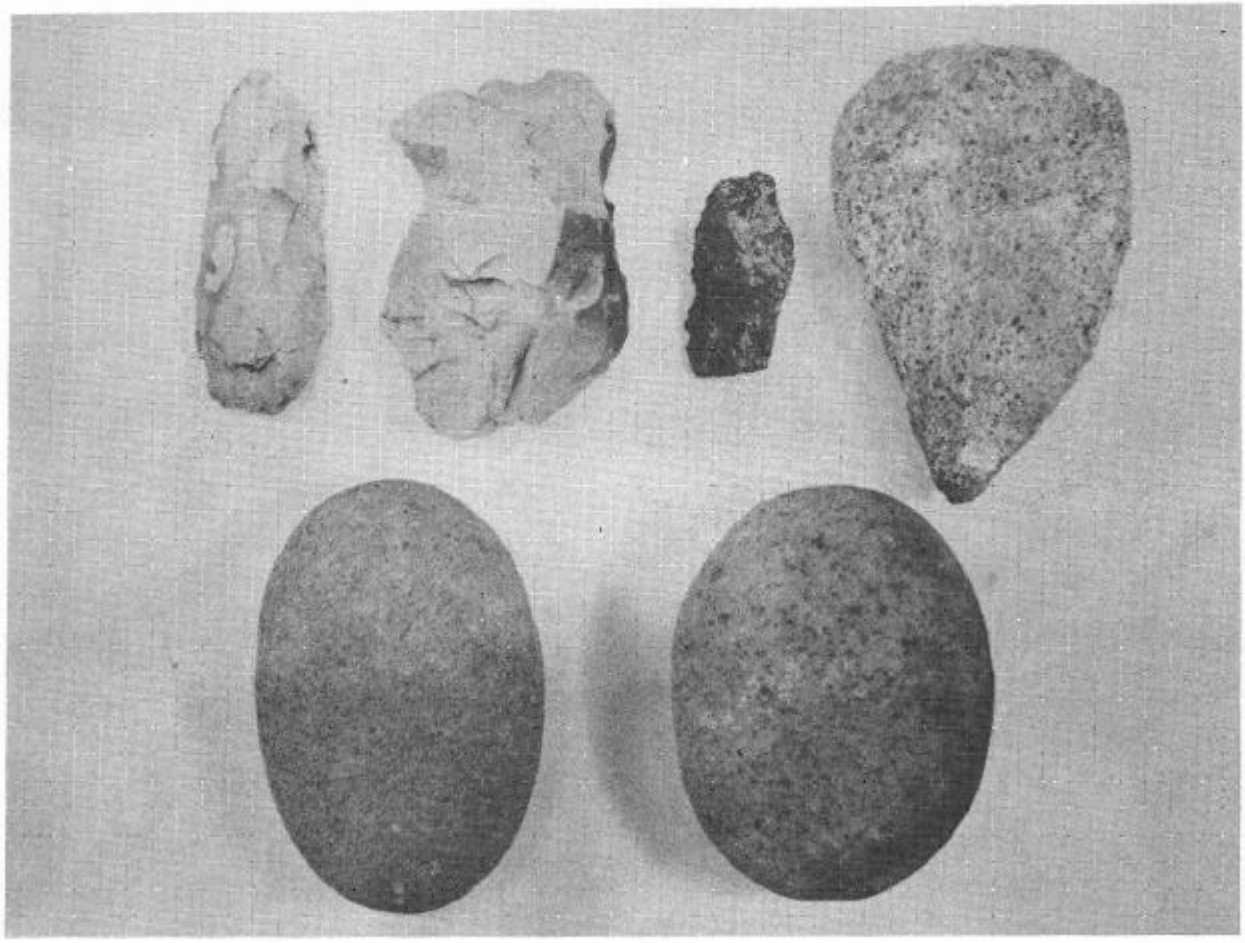


図版20　スポーツ・ゾーン遺構



図版21　スポーツ・ゾーン　上．トレンチ
〃　　下．出土遺跡





図版22　スポーツ・ゾーン出土遺物